
金色の星

天泣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色の星

【Nコード】

N5911Z

【作者名】

天泣

【あらすじ】

ナルトが戸籍上女の子で、イタチと恋仲になって、九尾とも和解して・・・忍に恋愛に一生懸命なお話を目指しています。

基本は公式のストーリーを守ってますが、綱手様登場あたりから完全にオリジナルです。

そのためオリジナルキャラもたくさん登場します。

（九尾も公式とはキャラが違います。火の国大名家なども登場しています）

あと、四代目火影が存命しています。

あんまり人が死にません。

平和主義なイタナルコの世界、よろしければごらんになってください。

「設定」に以上のことがもう少し詳しく書いてありますので、一度目を通していただけると幸いです。

（「金星」管理人ゴッホのサイトで掲載していたものを訂正加筆してこちらにまとめています）

設定

設定

ざっとした概要としては・・・

ナルトが戸籍上女の子で、イタチと恋仲になり、基本は公式のストーリーを辿るものの、綱手登場あたりから完全パラレルオリジナルな内容のお話です。

以下、箇条書。

- ・ナルトが戸籍上女の子です。
- ・ナルトは四代目の子供です。
- ・ちなみに四代目は生きています。
- ・ナルトは四代目の愛のスパルタのお陰で、下忍現在暗部に顔を出すほどの実力者です。（かといってスレナルではない・・・）
- ・普段は四代目考案の左手の呪印で九尾のチャクラを二重に封印していて、その呪印のせいであまくチャクラを練れないので、ドジでウストラトンカチです。
- ・小さい頃から駄目なオトナの四代目に代わって主婦じみた事をやっていたので家事は完璧です。もちラーメンは好物ですが・・・

- ・イタチさんは一族を滅ぼしても里抜けしてもいません。
- ・ただ九尾の一件でうちは一族はイタチとサスケ兄弟のみが生き残

っている状態で、今はサスケと2人暮らしです。

・イタチさんは現在暗部配属です。下忍の監督上忍になったカカシに代わり、四代目の護衛任務多し。

・カカシ先生は四代目の弟子です。

・しいていうなら、3代目↓自来也のじじい↓四代目↓カカシ↓ナルトみたいな師弟関係です。

・ちなみにナルト総受け（えっちい意味ではなく、みんなナルトが大好きって意味）

・なにがなんでもイタナルコ。

・年齢差5つの恋愛で頑張りたいと思います。

切に望む（前書き）

うずまき家の朝。ナルト12歳頃。

切に望む

切に望む

少し古びた家々や、人間などやすやすと踏みつづし、ひと飲みにしてしまうほど巨な獣たちの棲む森の向こう、遠く東からこぼれんばかりの光を纏って、強い白光の太陽が昇ってくる。
その輪郭からあふれる橙が、木の葉の里のシンボルのな火影岩に濃い影を作って、黄色と黒のコントラストが美しく目に映る。

・・・などのんびり窓の外を眺める暇もなく、忍の朝は始まる。
里長である火影の家ともなると尚更である。

ボタン！、と勢いよくドアを開けたのは、金色に輝く髪をツインテールにした少女。

両頬には細い筆でひいたような痣が3本ずつ。
華奢な身体をオレンジの忍衣で包み、仁王立ちする彼女の瞳は晴天のように澄んだ青。

「おとうさん、朝だよー」

一応最初は控え目に小声で言ってみる。

目の前ですやすやと寝息を立て、ベッドに潜り込んでいる父の表情には連日にわたる仕事による疲れがありありと浮かんでいる。
初めから大声で起こすのは酷だ。

「おとうさん!!」

ゆさゆさと布団から覗く、男にしては細い肩を揺するが、返ってくるのは「うーん」といううめき声だけ。

その反応に彼女は眉間に皺を寄せた。

毎朝の事ながら、父の寝起きの悪さには舌を巻いてしまう。

早くしないと、火加減に注意して焼いた半熟の目玉焼きが冷めて硬くなってしまう。

なにより早く朝食を済ませてくれないと後かたづけもできないし、洗濯だってまだ残っている。

「仕方がない」

彼女は腹に力を込めると、えい!と布団を思いつきりひっぱった。

「・・・っどわああっ・・・!!」

ひっぱった布団と一緒に父がベットから転げ落ちてそんな声を上げるが、いつもの事なので気にしない。

「あいたたた・・・ひっどいなあーこれが娘のする事かなあ・・・」

「やかましい！」

わざとらしく腕をさするので睨むと、相手はにへらへらと笑んだ。

「あははーごめん。起こしてくれてありがとう。おはよう、ナルト」

ナルトはそこで初めて頬をゆるめて、満面の笑みで応えた。

12年前、突如として木の葉の里を天災が襲った。

九尾の妖狐の原因不明の襲来。

里はよもや壊滅とまでに追い込まれた。

それを阻止したのは、木の葉の里を治める四代目・火影であった。禁術を発動し、生まれたばかりの自分の子に九尾を封印した。

その際の禁術のために彼の妻であり、九尾を宿した子の母は命を落とした。

九尾の破壊的なチャクラの気配は消え去り、里には平穏が戻った。だが、人々の深い悲しみは強い憎しみに変わり、彼らの心に残された。

日に日にそれは増してゆき、抑えられなくなった。

そして、はき出した。

虐待や蔑みとして。

妖狐を宿した子に。

それはとても悲惨なものだった。

何か騒ぎがあったと思って探し出し、見つけたその身体はいつも傷

だらけで、痛々しい痣が目を覆いたくなるほどだった。

それに反し、子の父、四代目への対偶は、まさに天と地の差があった。

里の人々は過大なまでに四代目を崇高し、それこそ神のように扱った。そのギャップに、四代目は父親としても、火影としても黙っていられなくなった。

本当の英雄が誰なのか何故わからない？
本当に辛いのは誰なのか何故気づけない？

恐怖心からそのような行動に出るのはわかる。

だが、もしもだ。

もしも天災を赤子ではなく自分の身に封じていたら、里人たちは自分にも同じ行動に出ただろうか・・・？

自分に封じる事は可能だった。

もともとそのつもりだった。

だが、妻が自分たちの子を抱いて 言ったのだ。

「木の葉の里は、火影であるあなたを失うわけにはいかない。私があなたの代わりになります」

お産後のためにひどく青白い顔で言ったのだ。

今思えば出血で立ち上がる事もままならないはずなのに、彼女は赤子を抱いて、九尾と対峙した自分を追ってきたのだ。

そんな彼女の瞳は とても強く、彼女の言葉を裏切る事ができなかった。

だが、お産後で気力、体力共に限界ぎりぎりであった妻の身に、脅威的な九尾を封じる事は不可能だった。

彼女の身体が耐えきれず、術の発動中に壊れ、九尾のチャクラが溢れ出せば、自分も、赤子も、里もひとたまりもない。

絶望的なことに、現役を退いた三代目火影はちょうど遠方に任務に出かけていて里にはいない。

自分しか、里を守る者はいないのだ。

四代目は妻の抱く赤子に目を向けた。

生きている事をその声で表しているかのように激しく 泣く娘に、
四代目は覚悟を決めた。

それを聞いた妻は微かに眉を顰めたが、刹那こぼれんばかりに微笑んだ。

母親のとてもあたたかい笑みだった。

「私とあなたの子ですもの。きっと・・・いえ、必ず立派に制してくれる」

科学的には言い表せない、生まれたばかりという事と、妻の言葉に
四代目は動いた。

妻の身体に印を結び、娘に九尾を封印した。

今思えば、妻の身体で術を発動したにしても、何故迷わず自分の
身に封じなかったのか、ただただ後悔するばかり。

何にしても、もう手遅れなのだ。

自分の後悔も。

我が子の運命も。

里の人々のふるまいも。

火影からの悲鳴じみた警告に、里の人々の暴行はぴたりと止んだ。ひとまずこれで事態の悪化は防げる。そう安堵したのもつかの間だった。

しばらくすると、里の人々は、子供を完全に無視しだしたのだ。決して声をかけることも、触れる事もしないで、ただその目に冷たい憎しみと怒りを込めて見つめる。

存在そのものの拒絶は、子供に絶大な孤独感を与えた。

身体に受けた傷は、九尾のチャクラも手伝っていつかは消えてしまっが、心に受ける傷は蓄積されるばかりで、完全に癒せはしない。

存在を拒否された子供は、いつしか心から笑うことも、泣くこともできなくなってしまった。

父がそのことを哀れみ、自分の非力さを嘆き、涙を堪えて、「すまない」と謝罪して抱きしめたことは何度だろう。

その度に、その子は言うのだ。

「私は大丈夫だよ」と。

私には、父さんやじっちゃんがいるし、里の人の中には私に優しくしてくれる人もいる。

だから 全然だいじょうだよ、と。

子供にはない色をその目に浮かべて笑うのだ。

小さな小さな手で自分 を抱きしめ返してくれるのだ。

この子は自分を恨んでいない。

里の人々を恨んでいない。

父としても驚くほどに、娘はまっすぐ素直に、誰よりも優しい子に育った。

お人好しだと言われたらそうだろう。

馬鹿だと言われたらそうだろう。

だが、それだからこそ、父は子を愛していた。

ナルトは今年で12歳になった。

苦悩の末にアカデミーを卒業し、下忍になった。

下忍になって 数週間。

以前は自分が結っていた髪も、今では自分で結えるまでに女の子らしくもなってきた。

また、小さい頃から自然と家事をこなしていたせいか、料理の腕はピカイチだ。

朝食に並ぶみ そ汁からは、かつおぶしの良い匂いがしている。

にへら、と四代目は目尻を下げた。

「俺って子育ての天才かもね〜ん」

「あーもう・無駄口たたいてる暇あったら早く食べてよ。今日は集合時間早いんだから」

自分に反して時間に厳しいナルトの鋭い声に、だがしかし四代目は食い下がる。

「どうせカシくんが遅刻してくるんだから一緒でしょ？」

「ったく。先生がそんなだから生徒に遅刻くせがついたんだってば！毎度サクラちゃんにあた られる私の気も考えてほしいってばよ」

本当に腹を立てているのだろう。

塩鮭をおかずに白飯をかき込むように食べて、挙げ句にずーっと音を立ててみそ汁を飲み干している。

女らしくなったというのは訂正・・・やはり女手がないせいか、少々下品に育ってしまった。

男らしいといえはしつくりくるほどに。

どうしたもんかと お茶をすすって考えてみるが、そこは天下の四代目。

何か浮かぶわけもなく、「お弁当だって ば」と渡された渦巻き印の弁当箱に、またひへらつと笑って弁当箱を受け取る。

単に親馬鹿なのだ。

再びお茶をすすりながら、ふと四代目は後かたづけを始めているナルトを見つめた。

「ねえナルト」

「ん、何？」

流れる水の音と、カチャカチャと陶器のあたる音がする。

視線は、袖をまくりあげているために露わになったナルトの左手首に固定される。

そこには、手首をぐるりと一回り、入れ墨のようにして読みにくい画数の多い漢字が並んでいる。

「実力・・・いつまで隠してる予定？」

一瞬、カチャと音が止まった。

水の音だけが空気を震わせた。

かさり、と窓際の観葉植物の葉が風に揺れた、ほんの少し後で、ナルトの少し高い声がした。

「まだ、ちゃんと制御できないから、もうしばらくつけてるってば」「そうは言うけど・・・暗部の任務でドジった事ないでしょ？Sラックでちゃんと九尾のチャクラの制御できてるんだから、普段わざわざ呪印でチャクラ抑圧する必要ないじゃない」

四代目の言葉通り、実はナルト、実力は下忍レベルじゃなく、暗部の任務をこなせるほどのレベルだったりする。

ナルトの左手首の呪印は、チャクラの流量をあえて止め、チャクラを練りにくくするもので、己に宿る九尾を危惧してナルトが四代

目に頼んで施してもらったものだっただ。

その呪印は特定の解除法を知っている者にか解けないもので、呪印を施した四代目と、ナルト しか解除法を知らない。

ナルトは暗部の任務の時にだけ呪印を解き、本来の力で戦いに臨む。

状況にあわせて解くか否かを判断しているのだ。

「いやーまー・・・それはそうだけど・・・もしもって事があるじゃん？保険かけとくのに越したことなく 言ってばよ」

キュと蛇口を閉めて振り返った彼女は、気持ちの良いほどのからりとした笑顔だった。

自分と 同じ色彩でも印象の違う、金の髪と、碧い瞳の少女の笑顔は、太陽のように目映い。

（この子が一番九尾を恐れている）

否、人を傷つける事を恐れている。

四代目は秀麗な眉を顰めた。

ちりりと心が痛む。

身支度をして、忍具やら弁当やらの入ったリュックを背負ったその背中、どこか逞しく、どこ か寂しげで・・・だから四代目は

微笑んだ。

「いってきますっばー!」

「うん、いってらっしゃい」

スリーマンセル制のおかげで生まれて初めて友達と呼べる人が出来たようで、毎日楽しそうだから、だからいつか・・

(いつか・・心から笑える日がくるよね・・)

迷惑ばかりかける自分を愛してくれてありがとう。

ボタン・・と玄関のドアが閉まる音がした。

今日もつずまき家の一日が始まる。

月を読む 1

噂を聞いた。

些細といえは些細な噂であったが、それが飛び交うのが暗部内となると、少し ニュアンスが違ってくる。

場所はここ上忍の待機場所「人生色々」である。

「知ってるか？すべての任務を無傷で帰ってくるヤツがいるらしいぜ」

「ああー知ってる知ってる！すげえよなあ。俺なんかいつも切り傷の一つや二つ作ってくるっつの」

「俺もー。でも12歳って話だろ？かなりすごいよな」

「12！？それほんとか？うっわー」

「その上女らしいぜ。俺なんかより強いくのーなんざたくさんいるだろうけど、12歳より弱いかもしれないってのは痛いよなー」

「・・・俺自信なくしそう。でも会ってみたいなー・任務一緒になんないかな」

という会話をここ最近幾度となく耳にした。

くだらない・・・とうちはイタチは茶をすすった。

背に少し流れる鴉の羽のような漆黒の髪をゆるく一つに束ね、額に
まいた木の葉のマークは数え切れないほど戦闘をこなしてきたせい
か、細かいキズで金属がところどころこぼれ、白くにぶい磨製され
た色を見せている。

首元の大きく開いた上着の背には、今は中上忍が着用を義務づけら
れているベストのために見えないがうちはの家紋が染め上げられて
いる。

木の葉の里随一とうたわれる血継限界「写輪眼」を意のままに使い
こなすという事と、それを除いてのすさまじい戦闘能力のために彼
は里のみならずかなり有名であった。

そんな彼は任務が一段落した事もあり、軽食をとり今は食後の一杯
をやっている。

あくまで緑茶だが。

と、イタチの向かいの席に腰を下ろした者がいた。

「ここ3日間連続で任務だったって聞いたから家で休んでるかと思
ったけど、ここにいたんだ。いやあゝわざわざお前んち行く手間省
けて助かったよ」

そう言うてにんまりと笑ったので、顔下半分を隠している布に皺が
寄った。

イタチは湯飲みを置くと訝しげな視線を相手に向けた。

「何の用ですか？」

「あ、なあーにその言い方。可愛くないねえ」

あんたに可愛いと言われても嬉しくない。イタチは変わらない表情

の裏で思った。

「ま、いいや。ところでさ、月読って知ってる？」

イタチは秀麗な柳眉を顰めた。

露骨な反応に力カシは苦笑すると続けた。

「どう思う？」

「・・・どうと言われても」

正直イタチにとっては関心のない事だったので何ら思う事はない。
しいていえば己の血継限界の眼術のひとつと名称が同じだと思うく
らいだ。

「実際に見てみない事には何とも言えません」

「まあ・・・ね。今まで単独任務が多かったらしいからな」。俺も会
った事ないし・・・でも今度ツーマンセル組まれるらしいよ」

「四代目がおっしゃったんですか？」

噂にはデマが多い。

聞くと力カシは頷いた。

「参考にしたいって聞かれたのよ」

「月読のパートナーに誰がいいかですか？」

「そうそう、だからお前を推薦しといたから」

「・・・は？」

湯飲みに手を伸ばしていた手が思わず止まった。

「何で俺を推薦したんですか？」

「いやーだって条件にぴったりだったんだもん」

「条件？」

「経験豊富で他人に干渉なくて腕が立って任務成功率90%以上
って条件」

一息に言われ、イタチは再度ため息をついた。

「その事を言うために俺の所にきたんですか？」

「一応知らせといた方がいいと思ってさ。ま、そゆ事でツーマンセル組んだらどんな感じか今度教えてね。じゃ」

カカシはひとつ手を振ると、そこさと店の暖簾をくぐっていった。
しまった。

残されたイタチは重いため息をひとつと、だいぶ冷めてしまったお茶を一気に飲み干した。
少しだけ頭がすっきりとして、今度は安堵の息を漏らしたとき、ふゆい！と小さな影が店に入ってきた。

伝令鳥だ。

伝令鳥はイタチの手元に手のひらほどの大きさの巻き手紙を落とし、またふゆい！と飛んで行った。まさかと思って心なしか急いでそれを広げたイタチは微かに目を見開いた。

本日夕刻火影邸に來られたし。

イタチは何度目かのため息をついた。

「任務内容は二人とも読んだね？」

黒と白の暗部装束を身に纏い、背に鰐が四角くごく薄い刃の真っ直ぐ伸びた太刀を負い、顔に

は白塗りの面を付けた二人の忍に四代目は確認するように微笑んだ。

「失敗すると後々困るやつだから二人とも頑張つてね。ああそうだ。イタチはここ最近連続で任

務が続いてたから疲れが出るかもしれない。月読、フォロー頼むね」
「はい」

そう高く澄んだ声で答えた隣をイタチは振り返った。

そう、隣にるのは月読なのだ。

身長は自分よりも頭二つ分ほど低く、華奢な体躯のせいか背の太刀がかなり大きく見える。

腰にまで届きそうなほど長い黒髪は少しのくせもなく滝のように背に流れ、それに覆われるように顔にはまった面は、右頬に朱色で滴のような形の点が縦に三つ描かれただけのとてもシンプルなものだった。

と、イタチの視線に気づいたのか、月読がイタチに顔を向けた。表情の変わらない無機質な面がこちらを向いている。

視線が絡み、ふと相手の瞳が青だという事に気づいた。

どこまでも澄み切った水のような、果てしなく広がる空のような、そんな碧。

自分の不躰な視線を真っ向から見返すそれはとても人を殺せるような目には見えなかった。

今まで単独で任務をこなし、そのすべてを無傷で帰ってきたという噂は本当なのだろうか。

ふいにその青が動いた。

瞳が少しだけ横にのびて、どこか潤んだように見える。

（笑った・・・？）

嘲りや哀れみの類の笑みではなく、やわらかく包み込むような労りの笑み。

それは決して不快ではなかった。

思わず魅入りそうになるイタチを止めたのは四代目だった。

「では時間厳守で頼む。・・・もしもの時は任務を放棄してくれて構わない。生きて帰ってきてくれ」

厳かな四代目の声に二人は一瞬だけそちらに顔を向け首肯すると、どろんと煙を残して姿を消した。

気配が同じ方向にもものすごいスピードで遠ざかっていく。

四代目はふうーと大きく腕を伸ばして深呼吸すると、机に頬杖をついた。

事務用の横長の机には、端から端まで見上げてしまふ高さで自分が推考し、納得したうえで判を押すべき書類が積まれ、並べられている。

明日までにこの半分でも終わらせておかないと里の責務が滞ってしまふ。

四代目は適当に書類をとると、右手で判子をくるくるまわしながら読み進めていく。

「全く・・・カカシの言ってること違うじゃない。明日昼休みにでも説教しにでも行くかな」

とん、と朱印を押して次の書類へと目を走らす。

口は動いたままだ。

「なあーにが干渉だよ。イタチ、めっちゃめっちゃ気にしてたじゃん。月読がナルトだってバレたらどうしてくれるんだよー」

あんなにじーっと見つめちゃってさー。

とん、とん・・・と下忍に任せられる任務の多かったせいも案外スムーズに判子が押されていく。

「まあー深追いはされないと思うし・・・イタチなら最悪自分を偽性にしても任務遂行してナルトも守ってくれると思うけど・・・」

一人だと万が一命を落とす可能性があるとなると三代目に言われてツーマンセルを考えてみたものの・・・。

「うちはをナルトに近づけるのはきついな。うちはにとって九尾は仇になるよな・・・」

依然として血継限界最強と謳われる写輪眼の名家うちはの者は里に二人しかいない。

若干15歳の宗主であるうちはイタチと、その弟であるサスケだ。

「12年前の九尾の襲来でうちは一族は二人を残して全滅。九尾も派手にやってくれたもんだ」

ずるずると机に突っ伏してつぶやく。

「あーしまったなあー。俺人選ミスしたかなー・・・でもイタチは復讐とか仇討ちとかわざわざしなさそうだから大丈夫かな・・・」

あー、もうそもそもナルトの暗部入隊を反対すれば良かったけど、

あの子強いからなあー。ぐ

ずぐずとしばらく考えあぐねた末、四代目は身体を起こした。

「ま、仕方ないか」

自分が悩んだところで事態が好転するわけではない。そもそもまだ何も起こってはいないのだ。

さっさと仕事終わらせて、作っておいてくれる晩ご飯食べよう
と・・・。

月読の戦い方は見事としか言い様がなかった。

上忍レベルの敵の忍を一人ずつ、ときには二、三人同時に着実に仕留めていく。

それも確実に一撃でだ。

深い森の中、しかも夜の暗闇の中でも、動きに無駄はなく、迷いもなく、とても俊敏だ。

するすると敵のクナイや手裏剣も避け、腕に添うように構えた太刀で仕留め、すぐさま敵から離れるために返り血を浴びることもない。

彼女の髪は、暗黒の中でもわかるほどに艶やかに宙に舞っている。

辺りを見下ろせる高さの木に枝に膝を突いて座り、月読の攻撃範囲から散り、群から離れた敵をクナイでこちらの一撃で倒しながら、イタチは眼下にの光景を食い入るように見ていた。

流れるような彼女の動きは目で追わずにはおれなかった。

彼女が自分の調子を気遣ってか、自分が接近戦をしかけるから援護を少々不安だった。

しかし彼女が駄目なようなら自分が出て行けばいいだけの事だとその申し出を受けた。

なるほど、彼女は申し出るだけの実力を十二分に備えているようだ。

敵の数はだいぶ減ってきていた。

任務内容は以前何者かが持ち出した木の葉秘蔵の禁術をまとめた巻物の奪還と、持ち出した者の割り当てだ。

奪還といっても大本の巻物は盗まれた数刻後に取り戻したのだが、敵も油断ない者で、巻物の一部をコピーしていたのだ。

そして今夜その受け渡しが行われると情報があつた。

直接的に戦争になりはしないだろうが、どこかの里にコピーが渡つたら、遅かれ早かれ木の葉にとって致命傷になる。

敵もその利用価値を心得ているからだろう。

その場には数十人の忍がいた。

ただ受け渡しの相手側の人間はまだ来ていないようだった。

その事はすでに月読の攻撃が始まった後に気付いたことなので、来ていたとしても騒ぎに気付いて早々に引き上げてしまっただろう。

この際望めるのはコピーの奪還、もしくは排除。

後者のほうがてっとり早いだろう。

イタチはホルダーに手を伸ばしつつ、それまでいた木の枝を強く蹴った。

背を反らせるようにして飛び、下を仰ぎ見る。

ふつと一度目を閉じ、次の瞬間開けられた彼の瞳は曇りのない漆黒から、血を思わせる鮮やかな緋色へと色彩を変えていた。

紅に浮かぶ黒でひかれた二重円と、外側の円に絡むようにのっている3つの巴型の模様。

木の葉の誇る血継限界・写輪眼。

(4人・・・いや6人・・・)

月読のそばに3人。

自分と同じ高度の、20メートルほど離れた木の枝に1人。
もつと後ろの木にもう1人。

そして自分の背後に1人。

下の3人はほどなく月読が倒すだろう。

ゆえに自分が狙うのは残りの3人。

イタチは思った瞬間に腕を振った。

手応えを確認する前に上半身をひねり、身体を回転しつつもう一手。
数秒後に刃が肉にもぐる音をうめき声が1つ、2つした。

・・・1 つ足りない。

（はずしたか）

前日までの疲れは想像よりもはるかに身体に残っているらしい。
ざっと音が立つのも気にせず小枝をなぎ払って一番近い枝に降り
つく。

すでに敵に自分の場所はバレている。

物音を気にしている暇はない。

木の間から月読の様子を窺うと、彼女はすでに2人倒し、残りの1
人に斬りかかろうとしているところだった。

（問題は月読ではなく自分だ）

どこから仕掛けてくる？

写輪眼をあたりに巡らせ、気配を探る。

上。

そう感じた瞬間に頭上の木の葉の中から銀色の光が躍り出た。
咄嗟に足にチャクラを溜め、自分の乗っていた枝を思いっきり踏み
壊し下へと逃れるが間に合わない。チャクラによって粉碎された木

の破片の間を、太刀が垂直に落ちてくる。

このままでは落下した末地面に激突するか、着地して太刀に斬られるかどちらかだ。

疲れがすべての感覚を鈍らせる。

イタチは顔をしかめると身体を折りクナイを投げた。

敵がそれを避けたその隙に着地をとる。

しかしかすかに反応が鈍ったその瞬間を狙われた。

「・・・っ！」

右足に熱い痛みが走る。

身体が反射的に強張るのを何とか制し、転がって敵との間合いをとったが、跳ねるように着地をとった敵はすぐさま木の幹を蹴り向かってきた。

武器を取る暇はない。

第2打を防ぎきれない。

そう判断して腕で防御の構えをとった時だった。

甲高い音がしたかと思うと、それに続いてずん！とにぶい嫌な音がして敵の太刀が止まった。

イタチは知らず目を見開いた。

「月読！」

太刀を止めたのは紛れもなく月読だった。

彼女は左腕そのもので太刀を受け止めていた。

暗部共通の白い防具は無惨にも砕け、太刀の食い込んでいる所からは止めどなく血が噴き出している。

月読は一瞬ひるんだ敵の喉をためらいもなく掻き斬った。
ぱん！と血潮が跳ね上がる。

敵の血と自分の血を浴び、彼女は全身を真っ赤に染めた。

白い面が脂でひかるのに対して、艶やかだった髪は血を吸ってどす黒くなっていた。

どさ、と力を失った身体が地に伏すと、月読はイタチが止める間を与えぬほど自然な動作で左腕に埋まった太刀を引き抜いた。その衝撃に新たに血が噴き出し、ぽたぽたと落ちて地面にしみをつくっていく。

「つく・・・読・・・」

「・・・大丈夫ですか？」

そう言っただけイタチのもとに膝をつき、斬られた足を見ようとする月読をイタチは啞然と見た。

（こいつ・・・）

何とも言い難いぐらい腹が立ってイタチは月読ののばした右手を掴んだ。

「俺の心配よりも自分の心配をしろ。早く止血しないと死ぬぞ」

「いや私は・・・」

「助けてもらったのは感謝する」

自分の爪の甘さの尻ぬぐいをしてくれたのだ。謝念は当然ある。

だが、とイタチは月読の面を睨んだ。自分を助けておいて己の身を省みない行動がかんに障った。

「傷を見せろ」

怒気をはらんだ声に月読はしばし躊躇ったすえ、かすかに痙攣している左腕を差し出した。

イタチは顔をしかめた。

傷は骨まで達していた。

皮膚は醜く潰れ、未だ出血がひどい。

ふれる指先が変に強張ったり力がなかったりしている。

イタチは面を外すと、ホルダーから分厚めの包帯を出し、それで左肩をきつく縛った。

腕を上げさせ肘のところもしばる。

次に消毒薬のついたガーゼをとりだし傷口に押し当てる。

とたん走った痛みにも月読が呻いた。

「・・・っ!!」

「我慢してくれ」

しばらくガーゼを押し付ける。

それでもひどい出血と、痛みからくる腕の痙攣は続いたが、とりあえず止血はできた。

新しくガーゼを出し、傷口にあてて別に取り出した薄手の包帯を巻いて固定する。

念のためにはめていた自分の手袋をはずし、そっとはめてやる。

月読の腕は自分より幾分か小さいので傷口を締め付けはしないだろうし、こうしておけば包帯がずれることはない。

最後に止血のための関節部分の包帯を外す。

完璧な処置とはいえないかもしれないが、このまま早く病院につれていくしかない。

そこまで無言で手当をして、イタチは長く息をはいた。

「・・・俺のミスだ。すまなかった」

「そんな・・・謝るのは私です。ちゃんとフォローができなくて・・・ごめんなさい」

「俺の不手際が招いた事だ。お前が謝る必要などない。それより早く後始末をして帰ろう。お前の腕を医者に見せないと・・・」

イタチは一度月読から視線をはずし、俯いて斬られた右足を確認する。

予想より傷は浅かった。

月読の怪我と比べたら可愛いものだ。

染みるような痛みがないことから毒のおそれもない。

イタチは簡単に包帯を巻いて立ち上がった。

それにつられてしゃがんでいた月読も立ち上がる。

鬱蒼とした木々の元、月明かりを頼りに2人は辺りを見回した。

月読が接近戦をしかけたおかげで死体がほぼ一力所にかたまっている。

これならわざわざ集めなくても、火遁で一瞬で任務が終了できる。

イタチはすぐに印を結び、草の間をぬって火球を放った。

とたん広がった紅の光に一瞬間が途切れ、暗闇を炎が赤い触手で撫でる乾いた音が辺りに響き渡った。

「あの」

月読の澄んだ声が響いたので振り返ると、彼女は俯いて、どこか決まりが悪そうに立っていた。

「手当て、有り難うございました」

「・・・？」

「後は大丈夫です。少し寄りたい所があるので先に失礼します」

（寄りたい所？）

疑問符を浮かべるイタチだったが、それよりも彼女の身が気になった。

「構わないが、万が一襲撃されたらどうするつもりだ？」

敵の核部分は始末したが、もしかしたらまだ敵がいるかもしれない。せつかく手に入れたコピーを消去された拳げ句仲間を殺されたのだ。出会ったらただではすまされないだろう。

そうでなくても暗部は何かと目の敵にされる存在だ。

含むところを持つ者に遭遇したらただですまないかもしれない。

手負いの彼女が応戦できるかなど考えるまでもない。

片腕があれば印も結べないのだ。

押し黙った月読にイタチは質問を重ねた。

「里の方向なのか？」

「里の敷地内は敷地内です」

「ではそこまで同行しよう」

「えっ！！それは・・・ちょっと・・・」

しづる月読にイタチは目を細めた。

「お前の私用を知りたいわけじゃない。お前の護衛がしたいだけだ」

「その気持ちだけで十分です」

顔を上げて月読は首を横に振った。

「だが・・・」

「すみません」

食い下がるイタチの声を月読は遮った。

刹那小柄な影が視界から消えた。

「・・・全く・・・」

反射的にイタチは月読の気配を追った。

月を読む2

（なんて速さだ）

右足の傷が痛むが、イタチは構わず飛んだ。
未だ月読との距離は数メートルはある。
迷っているはずにまかれる。

体力はまだ持ちそうだが、半刻ほど真剣に走っているとさすがに
疲れてくる。

すでに里までほどこない所まで来ていた。

（一体どこに行くつもりだ。この先は里の森に入るだけだぞ）

枝の間から里の防壁が視界に入り始めているが、月読のスピードは俄然落ちる様子がない。

2人は山腹を縫うように登っていた。

「！」

イタチは急に進むのをやめ、足場になっていた木の枝から飛び降りた。空中で前転し、空気抵抗をつけて着地する。

「・・・気配が・・・消えた？」

今自分が立っているところで、忽然と消えたのだ。何かに掻き消されたように一瞬にして。

イタチは視線をせわしなく四方に向けた。

かすかに上がった呼吸を落ち着かせ、じっと神経を張りつめる。じんわりと目が熱くなった。

イタチはちょうど前方で視線をぴたりと止めた。目を凝らし、ひっかかったものを見極める。

（これは・・・）

前方の森一帯にチャクラの膜が張られている。
――結界だ。
確かめるようにイタチはそれに手を伸ばした。
ちりり、と火にかすったような痛みが走ったが、するりと手は結界を越えた。

（侵入者を拒む類ではない……。だが）

一歩でて半身を結界の向こうに入れて、イタチは頷いた。
結界の向こうは全く景觀が変わっていた。

何もせずにこの結界を越えれば、知らず森の中をぐるぐると彷徨わされることになっていただろう。

結界に隠れるようにして幻術が張られているためだ。

とても無造作に見えるその二つの忍術にイタチは感嘆した。

（見たところ半永久的なものだな。・・・月読か）

凝っては以内が、永続的なものであれば凡人にできるものじゃない。
半身を結界のこちら側にもどし、もう一度イタチは視線を彷徨わせた。

今度は結界を這うように目を凝らす。

（どこかに抜け穴があるはずだ）

これほどの術を解くのは正直骨が折れる。
少しでもチャクラが弱まっている所を見つけて部分的に破壊したほうが効率がいい。

目的の場所はすぐに見つけられた。
すこし左手の方向の下方。

イタチはそこに片膝をつき、かけられている幻術を解くべく、反対の印を結ぶ。

ぱん！、と乾いた音がして、そこだけ幻術が破壊された。
これだけ微弱的な破壊ならば月読に気づかれないだろう。
イタチはそこをくぐった。

月読の気配はすぐに見つけられた。

思ったよりもずっと近いが、何か月読のいるだろう方向から響いてくる音がある。

何かが流れ落ちる盛大な音だ。

夜の静寂を破るそれは、けれど自然の景観を壊すものではない。

「・・・滝？」

訝しげにつぶやいて、イタチはそちらへ歩きだした。

針葉樹の立ち並ぶ森をしばらく歩くと、次第に視界が開けてきた。

目線の上のほうに大きな岩と下へと動くものが見える。

やはり滝のようだ。

木々がなくなっただけ、地面を覆うのは笹になり、少し歩きづらい。

奔放に生えている笹をかき分けて、イタチは岩場に出た。
彼のいる所からほどない距離に 怒濤のごとく飛沫をあげる滝があった。

夜の滝はその身を漆黒にし、あたかも黒い龍のようだ。

絶対的な存在感に、イタチを一瞬息を止めた。

そうして滝に近づこうと歩を進めようとした時、見つけた。

滝のすぐそばに、ぼうつと小柄な影が見える。

月読だ。

思わず動きを止めたイタチの見る前で、月明かりにほのかに浮かぶ彼女はふいに左腕を伸ばした。

イタチのはめた手袋をはずし、包帯もはがす。

次の瞬間イタチは我が目を疑った。

（傷が・・・ない？）

淡い月光に浮かぶ彼女の腕は、イタチの見える所からでも真っ白で、どこにも傷なんて見えなかった。

（馬鹿な・・・そんなはずは・・・）

驚愕するイタチの前で、月読は黙々と動いていた。

手当てに使われていた包帯やらを丁寧に畳みホルダーにしまつと、目にも止まらぬ速さで何か印を結んだ。

ぼん、と煙に覆われ、その中から出てきた彼女は月読であって月読

でなかった。

（金の・・・？変化していたのか？）

漆黒だった髪は、金色になっていた。

金の鱗粉を振りまくしれは神々しいばかりに輝いている。
所々付いた血が黒く変色しているが、そんな事が気にならないほど
美しいものだった。

イタチは空に舞うそれに、心から魅入った。

そして、月読の手が顔に伸ばされ、面がとられた。
容貌が露わになる。

腕と同じ白磁の肌に、血色の少し欠けた唇。
頬には引つ搔いたようなあざが左右三つずつ。
変化していたのは髪だけだったようで、瞳は青のままだった。
金の睫に縁取られたそれは水晶のように光っている。

誰だ・・・？ いや・・・自分はあれが何者は知っている。

木の葉の里の者ならば誰でも知っている。
イタチはつぶやいた。

「うずまき・・・ナルト」

弾かれたようにこちらを見た彼女の顔には、これでもかと驚倒の色が浮かんでいた。

(うそだってばーーーー!!!!!!!!またと思ったのに何でここに
いるんだってば!!!!?)

ナルトは身動きがとれないほどに慌てた。

もう頭の中はショートしそうで、それは口調が普段のそれに戻るほどだった。

火影岩から見て右側を囲む山腹の一端にあるここはナルトの隠れ家的場所だった。

幼い頃、里の人々の目に付かない所はないかと森に入り、山腹を登っているうちに見つけたのだ。

家では忍術の修行はできないし、かといって里の演習場や周辺の森では里の人の目に付く。

ここは里からあまり離れていないが、わざわざ山を登ってくる人は少ないし、いたとしてももっと山裾のほうで狩りをしたり山菜を採

って帰ってしまうのでここまでは誰もこない。

それでも念のためにと結界を張り、幻術をかけた。

そうする事の自分のエゴに気が引ける部分はあったが、これ以上里の人々に冷たい目で見られるのは耐え難かった。

滝の脇には巨木がある。

真っ白な幹の、冬でも細長い三日月のような葉を茂らせる不思議な木だった。

その木の中は室になっていて、うねる根の間からそこに入ることができる。

ナルトはそこに修行用の巻物やら忍具やらを持ち込んでいた。

暗部となつてからはここで支度をしている。

家や火影邸で支度をして、入る所や出て行く所を万が一見られ、自分が暗部であることがバレたら父に迷惑がかかる。

九尾の器である自分は目立つ事を極力避けた方がいいのだ。

里の運営的に無視できないほどの力を身につけていたとしても、それを表に出しては何が起こるかわからない。

人前では呪印の影響を受けて、ドベでお調子者でいればいい。

というわけで任務を済ませたナルトがここに辿り着き、さあ着替えよう！と変化を解いた時イタチの声が聞こえたもんだからたまったもんじゃない。

（ど・・・どうしよう・・・私が月読だつてばれちゃったつてばよ・・・）

父には何があるがわからないから絶対に正体がばれないようにと言われている。

とりあえずーっ逃げる？

でも、今更逃げても正体がばれた事実は変わらない。

それに相手はあのうちはイタチだ。

今からうまく逃げられるわけがない。

（・・・っていうかうちは一族にとって九尾ってかなり危険だつてばよ！）

九尾はうちは一族を壊滅させた。

イタチが自分を快く思っているわけがない。

ダブルパンチのこれこそ絶体絶命。

ナルトの背筋を冷たい汗が滑り落ちた。

身を退きたい気持ちが表に出て、おずおずと後ろに下がった。
が、それはまずかった。

ナルトは汚れを落とそうと滝壺に非常に近い岩の端にいた。
そのため踏み下がった所に足場はなかった。
突然の浮遊感にナルトは悲鳴を上げた。

「えっ・・・！わっ嘘！」
「・・・っ！！」

イタチはとっさに瞬転してナルトの所まで飛ぶと、彼女の腕を掴んで引いた。
がくとひっぱられたナルトは、そのまま反動でイタチに抱き留められた。

「・・はあ・・・助かったってばよ・・・って今はそれどころじゃない！」

ぱつとナルトは腕をつっぱってイタチから離れようとするが、彼が腕を掴んだまま咎めるような眼差しで見下ろしてきたので動けなくなってしまった。

低い声音がナルトの耳朵を打つ。

「また逃げるのか？」

「べっ、別に逃げてないってばよー!!」

「逃げようとしている」

「あんたが追っかけてくるからだってばよー!!」

「イタチだ」

「・・・は？」

「うちはイタチだ。名前ぐらい覚えてくれてもいいだろう」

イタチはそう言うとナルトの負傷していたはずの腕を見た。
そこにはやはり傷は残っていない。

（確か九尾の影響で・・・）

怪我をしても瞬く間に治ってしまうと聞いたことがある。

それにしてもこんなに早いものなのか。

なめらかな肌の感触に少し酔いしれながら、イタチは傷がないことを確認すると彼女の腕を放した。

ナルトはすぐに距離を置こうとしたが、イタチの様子に足をとめた。

彼の様子はあまり馴染みのないもので、ナルトは居心地の悪さを感じたが、危機感のようなものは感じなかった。

不思議そうな視線を相手に向ける。

「・・・えっと・・・イタチ・・・さんは・・・私の事・・・その・・・嫌いじゃないってば？」

「嫌いも何も今日会ったばかりだろう」

イタチはつぶやくと岩に腰掛けた。

目線が近くなったことにどきりとしながら、ナルトは問いを続けた。

「いやそれはそうだけど・・・だってイタチさん・・・うちはじゃん」
「俺がうちはだとお前を嫌うのか？お前は俺がうちはだから逃げるのか？」

「それは違う・・・別にイタチさんじゃなくても逃げたつてばよ」
「やはり逃げるつもりだったか」

「え！！あっ！！・・・っ・・・」

痛い所をつかれて頭を抱えるナルトは、外見に相応した普通の子供に見える。

本当に月読なのかと疑いたくなるほどだ。

イタチは苦笑すると自分からも問いかけた。

「お前、歳は？」

「お前じゃないつてば。ナルトだつてばよ」

むっとした声で返されたことに、イタチは笑みを深めると律儀に返した。

「悪い・・・ナルト、歳は？」

「今年で１２歳だつてばよ」

（そうか・・・サスケと同じ歳だったな・・・）

「いつから暗部に？」

「んー・・・3ヶ月ぐらい前だったかな・・・って何でこんな事聞くってば？」

小首を傾げると、謝罪を請う切なげな眼差しを向けられた。

「・・・嫌だったか？」

「へー？いや全然嫌じゃないってばよ！」

むしろナルトは嬉しかった。このように肉親やそれに近い人以外から質問されるのは初めてなのだ。

（イタチさんは私の事、嫌じゃないみたいだってばよ）

里の大人たちは自分を毛嫌いする。

温かく接してくれるのは父とその弟子のカカシ、師匠の自来也。

三代目にアカデミーのイルカや一楽のおっちゃんぐらいた。

物心ついたときから罵声を浴びていたので慣れたといえば慣れたが、やはりこうして普通に接してもらえるのは嬉しい。かなり嬉しい。

自然とにこにこするナルトをイタチは不思議に思ったが、質問を続けた。

「忍の技術は誰に教わった？火影様か？」

「うん。お父さんに習ったってばよ。エロ仙人にも習ったことあるってば」

「エロ仙人？」

「あ・・・えーつとお父さんの先生なんだけど・・・」

「まさか・・・三忍の自来也の事か？」

「そうそう！自来也だってば！なんでイタチさんがエロ仙人の名前知ってるってば？」

「忍なら誰でも知っていると思うが・・・」

三忍と言えば木の葉のみならず他里にも名が轟いている。

そんな三忍の１人と面識があるばかりか修行までつけてもらったというのにこの子の無頓着さは何だろう。

だがそれは好ましいものだといタチは受け止めた。

「小さい頃から修行してたのか？」

「うん！だから私ってば今はかなり強いってばよ！」

胸をはる彼女にイタチは苦笑した。

「確かに・・・一度手合わせを頼みたいな」

「ええーっ！！それは駄目だってばよ・・・」

「・・・駄目？」

「その・・・私と一緒にいるとこ見られたら、イタチさんに迷惑

かけるってばよ」

しゅん、と俯いてしまったナルトに、イタチは地雷を踏んだと自分を叱責した。

ナルトは「ー里の者から九尾憑として蔑まれ、四代目火影がいるというのに言葉にするのも躊躇われるようなことをされている。

四代目はなんとか歯止めをかけようとしているが、例え信頼の篤い四代目が出たとしても、恐怖心や怒りというものは簡単にはなくなるらない。

イタチ自身、九尾の妖狐事件についてはいろいろと思うこともあるが、実際にナルトと話してみても、負の感情は全く感じない。もともとあつた同情心や庇護の気持ちのほうが大きくなる。

「俺も、正直九尾は怖い。・・・うちは一族はあのときに壊滅したからな。父は九尾との戦闘で死に、母はあの時の怪我がもとでしばらくして死んだ」

「・・・」

ナルトがびくりと身体を震わせた。それに気づいたがイタチは続けた。

「四代目火影様は強い。俺なんかよりもずっと強い。忍としても人としても」

「・・・何が言いたいんだってばよ？」

悲しげに揺れた晴天色の瞳を、イタチは真っ向から見返した。

「例えお前に封じられているのが九尾だとしても、俺はお前を怖いとは思わない」

里長を信頼している。

彼の術を信頼している。

だから恐怖心はない。

「それに、お前と話してみて、怖さもなにも感じない。俺は、お前を嫌おうとは思わないよ」

「・・・っ・・・」

ナルトは胸で詰まっていたものが溢れ出すのを止められなかった。とっさに顔を手で覆うが、それでも隠しきれずに零れたものをイタチに咎められる。

「なんで泣くんだ」

ため息をつき、立ち上がってすぐそばまできたイタチから俯いて顔を隠しながら、ナルトはひきつく声を絞り出した。

「っ・・・だって・・・だって・・・嬉しいんだってばよ・・・っ」

「・・・嬉しい？」

「・・・うん・・・そんな風に言ってもらえることなんて・・・一生ないと思っていたから・・・」

ぐず、と鼻をすすりながらも涙を拭い顔をあげたナルトは満面の笑顔だった。

任務開けでところどころ汚れた顔。

涙で目元もぐちゃぐちゃで・・・でも、花がやわらかくほころぶような愛らしい笑みに、イタチは大きく目を見開いた。

「・・・・・・」

「・・・イタチさん？」

微かに笑みをひっこめて小首を傾げ、潤んだ大きな目でこちらを見上げてくる様子に、イタチは顔が熱くなるのを感じた。

咄嗟に口元を手で覆うが、少しでもその笑みをみていたくて、顔は背けられない。

なぜだろう。

目の前の金の光を・・・無視できない。

何故もつと早くこの子と出会えなかったのだろう。

里にとつて、さまざまな意味で有名な少女だというのに。

イタチは複雑な思いを感じながらも安心させるために微笑むと、そつと指先でまだ残っている涙をぬぐってやった。

「もう一つ聞いて良いか？」
「いいってばよ」

ナルトはほどなくして泣きやんだ。
目の下が少し赤くなっているが、表情は明るい。
防具を外し、いつもの忍衣に着替えて、今は濡らしたタオルで髪の毛を落としている。
声をかけたイタチとはいえば、適当に歩き回ってナルトの隠れ家を物色していた。

「何で名前が月読なんだ？何か由来があるのか？」
「えっ・・・ああ、由来・・・あるってばよ」

どこか歯切れ悪くナルトは答えた。
ぎゅっ、と髪をタオルで挟む。
だいぶ血は落とせたが、つんとした鉄のにおいは消えない。
ナルトは顔をしかめた。
このにおいは嫌でも自分のした行為を思い出させる。
覚悟を決めた事でもやはり心のしこりがふさぶられる。

沈黙した彼女のそばにもどりながらイタチが再度声をかけた。

「ナルト？」

金色の頭が動く。

しばらくしてどこか掠れた声が響いた。

「・・・私が初めて殺した子が・・・私を見て月読って言ったんだってだよ」

その子は血継限界を持っていた。

誰にも手出しが出来ないほどに強力で、対処に困った地域政府が木の葉に依頼した。

事前調査の結果、いまだ五里がちゃんと形成される前に一族として名を馳せていた者達の子孫が先祖返りで能力がたのだろう、ということだった。

里で保護するか、という話もでたらしいが、結局は殺害するということで任務が決まった。

「私よりもちっちゃくて・・・やせ細ってて・・・。私を見て、本当に嬉しそうに笑って、月読様がつれてってくれる。お父さんとお母さんの所に早くつれてってくれるって・・・」

その子は心から死を望んでいた。生きることが諦めたその子笑顔はとても忘れられない。

膝を立てて座り、その上に顔を置いてナルトは夢げに笑った。
イタチは黙ってその笑みを見つめていた。

「里に帰ってきてから調べてみたら、月読っていうのはその地域の昔話の中の死の国の神様だってわかったんだってば。特にあの子の一族は月読という神を信仰してたんだってばよ。・・・あの子にとっては、血継限界も、・・・ましてや忍なんて関係なかった。・・・制御できない力があるってだけで・・・」

ぐ、っと唇を？んだ様子に、イタチはあえて問いかけた。

「月読は・・・どんな姿なんだ？」

ナルトは弾かれたように彼を振り返ったが、しばらくしてまた口を開いた。

「髪が黒くて、肌が真っ白で、右頬に模様があるんだってば」

「・・・お前は月読になりきっているというわけか」

「私が初めて殺したあの子のことを忘れないために。・・・やるならところんやらないと」

にしし、と笑ってナルトは立ち上がった。

「私はこの里が大好きなんだってば。だから守りたい。だから暗部になった」

「それが殺しても？」

「その覚悟は忍なら誰でも持たなきゃいけないものだってば」

それを自分はある子の時に覚悟した。

「イタチさんは違うの？」

「俺は・・・」

見つめるナルトの顔を白い光が照らした。

月の光とは違う熱いほどの黄金を纏った白い光。

イタチはそれに言葉を切って空を見上げた。夜が明けたのだ。

答えられないでいる自分を彼女は振り返ると、太陽と同じ目映さで笑った。

「もう朝だってばね」

「ああ」

「早く帰って朝ご飯の支度しなきゃなー・・・あう、宿題終わってない・・・。またイルカ先生に怒られる・・・ああ、きっとサスケにはまた馬鹿にされるってば」

思い悩む様子に思わず笑ったイタチは、そこに登場した弟の名に柳眉を潜めた。

「サスケを知っているのか？」

「アカデミーで同じクラスだってばよ。・・・お兄さんの前で悪口は言いたくないけど、あいつ、いつも私に突っかかってきて、馬鹿にするんだってばよ。気に入らないならほっといてほしいのに」
「それは・・・」

イタチは少し考えて、嫌な顔をした。

どこか高飛車な性格の弟は、好き嫌いがそれなりに激しく、嫌いなものには目も向けないだろう。

だが好ましいものにはとことん執着する。

食べるものも好きなものであれば三食それでも平気なタイプだ。

それがナルトに対して突っかかっているとすれば――。

（これは、早々に地盤を固めたほうが良いか）

自分はナルトと出会った。

今回のこの縁をなんとか続けるためにできることをしなければ・・・。

「ナルト、・・・朝ご飯を作るということは、火影様はご在宅か？」

「うん。昨日はあんまり残業せずに帰るって言ってたから」

「そうか。・・・少しお話をしたいのだが、家に伺っても大丈夫だろうか？」

「え？うん、別に良いってばよ」

何か仕事のことがな？とあまりナルトは疑問に思わずにイタチに了承の旨を伝えると、彼はよかったと微笑んだ。その笑みに、ナルトはドキツとした。

（な、なんでこの人こんな綺麗なんだってばよ）

あまり美というものはわからないが、イタチがとても美形だということとはわかる。

弟のサスケも同期うちではとても人気があるしーナルトからするといけ好かないクールなガキだが。

イタチは年上であることもあり、精悍な顔立ちと落ち着いた雰囲気、に敵しそうな印象も受けるが、今のように笑うとがらりと印象が変わる。

とても華やかで、でも男性らしいものも感じて・・・でもなんというか綺麗で・・・とにかくときどきとしてしまう。

（うつ、このときどきはなんなんだってばよー）

家路に着くまで、ナルトは落ち着かない胸元をぎゅっと掴むことと

な
っ
た。

そして、突然の来訪者に四代目が驚きつつも、イタチをナルトの
ペアになることを了承したのは、それから1時間ほどあとのことだ
った。

月を読む2（後書き）

月を読む、これにて完結です。

おつきあいくださいました方々、ありがとうございました。

葉よ盛れ1（前書き）

木の葉崩しあたりの話になります。

葉よ盛れ 1

左手の呪印の事なんて、少しも頭に浮かばなかった。

「っ……!!」

恐ろしい速さで襲いかかってくる砂の爪を転がるようにして避ける。震えに閉じそうになる瞼をなんとか開けたまま相手を睨み、地面を蹴って駆けだした。

中忍試験の最中、突如として起こった異変。

視界を覆う無限の羽根。

響き渡った爆発音。

五影会議が試験と同時期に開催される事を不信に思っべきだった。

試験会場を飛び出したサスケを追って来てみれば、彼は焰のような黒い紋線を全身に這わせて倒れ伏していた。

そして対峙する砂の瓢箪を背負った少年は、異形の姿へと変じていた。

なんだ・・・これは・・・何が起こつた・・・？

四肢に砂を絡ませたあいつは一体何なんだ？

本能が告げる。

忍としての経験が告げる。

「…………逃げようっ…………」

その怯えが事態を悪化させた。

サスケとサクラを振り返った自分の脇を我愛羅は過ぎ去り、巨大な爪と化した砂の手をサスケに向かって伸ばした。

それからサスケを守ろうと前に出たサクラは砂に吞まれ、右後方の木に叩き付けられた。

スローモーションのようにひどくゆっくりと動いた光景に、ナルトは愕然と目を見開いた。

父は五影会議で里にはいない。

父の代理で試験を受け持った三代目は結界に閉じこめられているようだった。

他の上位の忍は、そちらに向かっていて、こちらには誰も気づいていない。

自分しかない。
自分しか仲間を守れない。

覚悟を決めて、そうして我愛羅を見た時だ。
ふいにどうして自分が怯えるのかわかった。

（同じだからだ）

自分に封印された炎と、我愛羅を取り巻く砂。

ナルトは曖昧に口を歪めた。

「仲間を失いたくないんだってばよ」

そうだ。私には仲間がいる。
畏れている場合じゃない。

ナルトは強く木を蹴った。

「駄目ですよ」

それ、禁術じゃないですか。

そう声が聞こえた瞬間に、紫炎の結界が霧散した。

はっとして辺りを見回すと、結界を張っていた音忍がうずくまってそこそこに倒れている。

そのうちの1人の所に鞘付の太刀を、瓦がざんばらに飛び去った屋根に立てた青年の姿があった。

長い黒髪をひとつに束ね、赤い瞳でこちらを無表情に見遣る青年を、大蛇丸は剣呑な、三代目はほっとした目で見た。

「イタチ・・・では帰ってきたのじゃな」

三代目は安堵の息を漏らし、声のしたほうを見上げた。
青い瞳と視線が通う。

「遅くなりました。途中救助活動してたもので」

「救助活動じゃと？」

「ええ、砂漠の真ん中で風影くんがぶっ倒れてたんでちょっと寄り道してきました」

口元だけをへらりと笑わせてそう言った金の輝きは視点を転じた。
穢土転生で呼び起こされた初代火影と二代目火影に悲痛な眼差しを
向けてから、その2人を己の両脇に配した男を鋭く睨み付ける。

「何て道徳心のない術使うんですか。こんな形で憧れの方々にお会
いしても嬉しくないですよ」

「あら、それは悪かったわね。でも、せつかくだからお相手しても
らったら？」

「誰かさんが風影くん奇襲してくれたお陰で無駄に体力使ったんで
ね・・・時間かけてなんかいられません」

四代目の言葉に大蛇丸は喉の奥でくつくつと笑った。

「そんな涼しそうな顔をしてよく言うわ。遅れたって言ったけど・・・
そうでもないんじゃない？私の予想よりもだいぶ早いわ」

「連絡された場所になあーんにもなくて、愉快な♪マーク付けてる人たちがいたりしたら慌てて帰ってくるでしょ。全く・・・諜報部のやつらまんまと騙してくれちゃって・・・」

「それはあなたの教育不足でしょ。私のせいじゃないわ・・・・・
そろそろおしゃべりはやめにしましょうか。風影を殺し損なったま
でか、あなたがこつも早く来てしまった。これ以上予定が狂うのは
嬉しくないわ」

大蛇丸はうすい唇をにたりと歪めると、鈍い光を虚ろな目に宿す
影の背を押した。

その振動にきよろりと灰色の瞳が四代目を捕らえ、弾かれたように
影が動いた。

初代は木を駆け上がり上方から、二代目を縦横無尽に生えた木の根
の間を縫うように走り、下方から。

上下を走る影の動きはほとんど同時。

息の合った動きを目の端に止め、四代目は体勢を低くして構えた。

そうして両手を身体の横に軽く垂らし、次の瞬間手の平にチャクラ
を集中させる。

チャクラで手の周りの空気を掻き混ぜ、瞬く間に小さな気弾を作り
上げる。

意識は影のままに、四代目は遠巻きに固まったしまっている木の葉
の忍に叫んだ。

「何ばおつと見てるんだ！！早く三代目を医療班の所におつれしろ
！――あとイタチ！俺の同行で疲れてるだらうけど、里で暴れて

る蛇を退治してきて！」

ごうごうと唸りを上げる激風と、ぐちゃぐちゃに生えた巨木のせいでちらりとしか見えない青い目にイタチは首肯した。

四代目の言う蛇とは、口寄せされ、今現在里で暴れているものらのことだ。

特に三つ頭の蛇は、巨大な体躯と刃物を物ともしない鱗を縦に忍たちの攻撃を難なく跳ね返し、だんだんと里の中心部へと近づいて来ている。

イタチは立てていた太刀を鞘から抜くと、屋根を蹴った。

イタチと、三代目を連れた暗部たちの気配が離れていくのを感じながら四代目はにこつと笑った。

「四代目火影として恥ずかしくない程度には強いつもりですけど、どうでしょうか？」

ざつ、と同時に上下から迫ってきた影に、四代目は笑みを顔に貼り付けたまま気弾をそれぞれに投げつけた。

投げ付けた気弾に影が動きを止めた隙に下段の枝に飛び降り、その間に印を結ぶ。

それに両腕の籠手に仕込んである口寄せ印が反応し、幾多もの三つ叉クナイが出現する。

「つよつとー！」

四代目は慣れたようにクナイをつなぐ鋼糸を一気にひく。
途端視界いっぱいにくナイが飛び、八方至る所に突き刺さった。
それを目視することもなく、四代目は”飛んだ”。

まともに初代、二代目と戦うつもりなど、端からない。

穢土転生は魂が口寄せされ、生贄の肉体が生前の姿を構築してしま
つたもはや魂を封印するしかない。

封印しない限り、何度攻撃を与えたところで身体はそれだけ再生す
るだけだ。

四代目は瞬転を繰り返して両火影の攻撃を避けながら、しばしそ
の動きを観察して安堵した。

（お二人とも、動きに無駄が多い。・・・完全に力を復元するのは
無理なようだな）

それならば動きさえ制限してしまえば封印はたやすいかも知れない。
四代目は形を決めると、二人を囲むように瞬転で移動しながら、そ
れぞれのクナイに印式を足していった。

と、突如伸び上がった木の根が四代目の進路を阻んだ。

一瞬動きを止めた彼を今度は水龍があぎとを開けて襲いかかった。

「ッ・・・!!!」

攻撃のタイミングが絶妙で、四代目はまともに攻撃を受けた。

ちよつと油断したかな、と頭の奥で自分をしかりつつ、激流に押し
つぶされながらも四代目はかすかに微笑む。

術式が完成していたからだ。

ドバツと水の流れから空中にほおり出された瞬間、四代目は封印の印を結んだ。

合わせ術の発動でお互いに近い場所にいた初代と二代目を囲むクナイらが紫色に発光し、その光が大きくなったかと思うと幾千もの光のクナイとなって半円状に彼らの周りを飛び回った。

瞬く間に光のドームが構築され、複雑な漢字の羅列がそこを走る。

――それで完了だ。

ごほごほと咳き込みながら四代目は封印式がちゃんと発動したのを確認すると、ふー、と水でびしょびしょに濡れた羽織を絞った。よし、と四代目は顔を上げ、印を結ぶと封印式のドームと共に瞬転した。

と、すぐに戻ってきた。

あっという間の出来事に、大蛇丸はますます表情をゆがめている。

「・・・ほんと・・・可愛くない子なこと」

「細かいことをしていないだけですよ」

両火影ごと封印式を瞬転させたのはそういった術式専門に整備された特別な研究室だ。

封印はしたもののあまり複雑な封印ではない。

もしかしたら解除されるかもしれない懸念もあったが、・・・単に完全に丸投げしてきただけなのでほめられることではない。

けれど、これで相對することが出来る。

「・・・さて、木の葉をこんな風にした理由はあとでゆっくり聞きましょう。・・・覚悟はできていますね？」

「私に勝つつもりでいるの？」

「俺をわざわざ里から出したってことは、それなりに評価していただいてるということですよ。多少は自信を持ちますよ」

青にもどった空に、ゆらりと炎の模様に彩られた白い羽織が緩やかに広がる。

大蛇丸の金の瞳が陰湿に細められた。

「それは・・・少し違うわよ」

ぼこり、と反らせた首が倍にふくれ、開けた口から蛇が頭を覗かせた。

あぎとを大きく開けたままに、蛇は太刀を飲み込んでいた。その太刀を引き抜いて、大蛇丸はぬめる舌で唇を舐めた。

「どう違うんです？」

四代目は体勢を低くした。

（あれは・・・草薙の剣か・・・？）

太刀が鈍く銀に照るのを目で追う。
その端で赤い舌が言葉を紡ぐ。

「面倒でしょ。黄色い虫にがちらつかれるのは鬱陶しいだけ」

舌が伸びる。

「それぐらいには評価はしているけれど・・・まあ・・・それだけよ」

次の瞬間、銀の軌跡と白い影がぶつかった。

限界から絞り出したチャクラで口寄せした親づんは目の前の巨体の
名を教えてくれた。

ああ、感じた通りだ。あいつの中にも化け物がいた。
ナルトは無意識に腹を押さえた。

（こいつも、元はあんなにでかいのかな）

漠然とそんな事を思う。

（夢の中で出てくる時はでかいもんな。やっぱでかいんだろーな）

自分の中の化け物とは、もう何度も夢で会っている。

小さい頃は札の何枚も貼られた檻の中から響いてくる低い声にうなされ、自分の泣く声で目が覚めるなど毎日。

成長するにつれてそういう事は少なくなったが、今でも声が聞こえる事はあるし、意識すればこちらから檻の前に行くこともできる。そうした時に見上げたあいつのぎよろりとした目は、樹齢何百年の木のとっぺんを見上げているぐらいに上にある。

（そんなのが私の中にいる）

我愛羅の中に守鶴がいたように。

ナルトはぎゅっと目をつぶった。

（私もあんなっちゃうのかな）

ずっと1人でいたら。

誰かを信じる事が出来なかったら。

大切な者がいなかったら。

いつか自分を失ってあんなってしまうのだろうか。

心深くで嘲笑が聞こえた気がした。

ナルトは、上がる息を落ち着かせると、大きく目を開けて前を見た。

「・・・・・・・・私はならない」

私は火影になるんだ。

あいつの力も、自分の力として里に還元できるのなら、なんだってする。

そのために、今は目の前のあいつをなんとかするのだ。

力がすべてだと言ったあいつは、私と同じ境遇なのだ。

力がすべてとしか思えなかったあいつには、そこに至るまでの苦しみがあつたはずだ。

それを理解できるのは、きっと私だけ。

私があいつを倒せたら、きっと何かが変わる。

「いくつてばよー!」

下から突き上げられる刀を紙一重で避け、クナイを投げ放つ。
ぐりぐりと肉に鉄が埋まる音がしたが、すぐに大蛇丸であったものはどろりと崩れ、ぼたぼたと砂が落ちる。

（なかなか捕まえないな）

がちがちと噛み合う鋼から火花が飛んだ。
刃越しにたりと白い唇が歪む。

「本当遅しくなったわね。どう？うちにこない？」

「冗談はやめてください。火影つかまえて何言うんですか」

「あら、残念ねえ」

かつ！と金の瞳孔が広がった。

「死になさい」

大蛇丸は一端後方に飛び距離をとると、身体の後ろに引いた太刀を
一気に四代目へと振りだした。

（……今だ！）

四代目は後ろに飛びながら術を組んだ。

『封印術・白炎閃の術！』

白く発光する炎を中心に燃え立つ紅の炎が大蛇丸を飲み込む。

が、ひゅん！と空気が避けたと思うと、墨のように黒い髪が熱風に広がった。

「私にそんなものが通用するとも思ってたか、青二才が！」

次の瞬間どすりと右腹部に埋まった痛みで四代目は目を見開いた。

葉よ盛れ 1 (後書き)

ごめんなさい、もう1話で終わります。

葉よ盛れ2（前書き）

後のお話で描写もありますが・・・。

うちの力カシ先生は四代目を手伝ってナルトを赤ん坊の頃から彼女がアカデミーに入るくらいまでは保護者みたいなことをしていました。

そのためとても大切にしています。

本当はサスケの修行になんてつきあいたくなかったけれど（ヲイ）、教育者の立場としてがんばってました。

という設定を加味して読んでいただけると読みやすいかも・・・。

葉よ盛れ2

「・・・・・・っ・・・・!!」

全身を熱い痛みが駆け抜け、頭の奥が痺れる。

同時に口から粘りを持った血が泡となって溢れ、嘔吐に似た感覚に眩暈を感じた。

刀を中心に、装束に染みる紅は恐ろしい速さで広がっていく。

「自来也に似て甘いわね。それでよく火影が務まるものだわ」

がくりと膝をついた金の髪を見下ろして、大蛇丸は艶やかに笑む。
そして刺した太刀を引き抜こうとして手に力を込めた。

その離れていく刃身を、華奢な手が掴んだ。

俯いていた頭が上がり、金糸の間からのぞく青玉が不敵に笑む。

「・・・甘いのは・・・あなたですよ・・・」

「どこか抜けているとは思っていたけど、ほんとうにおかしいよね。早くその手をはな・・・!」

(抜けない!?)

ギシ・・・ギシ・・・と刃身が音を立てるほどひっばるが、微塵も抜ける気配がない。

それどころか刀から手を離すこともできない。

口元を己の血で汚した彼の笑みが濃くなる。

大蛇丸は声を荒がせた。

「貴様・・・・・・・・何をした!」

「さあ?・・・・・・・・ただの・・・・青二才じゃないって・・・・っ・・・・事ですよ・・・・」

途端、刃身を白炎が走った。

それは柄を離れない大蛇丸の手まで達し、瞬く間に彼の全身を白く覆った。

「これは・・・」

肉の焦げる嫌な音と、独特のにおいがした。

白炎の登場と共に柄から離れた己の手を啞然と見つめる。

白炎は今までに感じた事のないほど冷たいもので、じんわりと、だが確実に身体を燃やしていく。

「おも・・・しろいでしょ、それ。・・・よつと」

四代目はふらふらと立ち上がると、両手を柄にかけ太刀を引き抜いた。

異物が無くなったために今までそれに塞き止められていた血が一気に噴き出した。

「っ・・・けほっ・・・」

咳が何度も喉を小突くが、四代目は大蛇丸から視線を外さない。大蛇丸は燃えるのとは違う、皮膚が泡立つぞくぞくとした感覚に目を細めた。

その様子に四代目は目を大きく開けた。

「とりあえず・・・術使われると厄介ですから・・・手、消しまし
ようか・・・」

四代目の言葉に呼応して腕の部分の炎が白さを増し、見ている目ま
で焼けそうなほど眩しく発光した。

「・・・つつ!!」

火の粉は皮膚を焼き、筋を焼き、露わになった血管に潜り、血を凍
らせながらすべてを壊し――封じていく。
激しい痛みに思わず声が漏れる。

しだいに腕は赤黒く爛れ、力を失ってだらりと垂れた。

「手が使えなければ、印は結べない。チャクラが流れなければ術は
成り立たない」

掠れた声が響いている間にすうつと太刀が消えていった。
ほらね、と白い顔で微笑むと四代目に眉宇を顰めて、自分を睨む青

い目を大蛇丸は忌々しげにこちらも睨む。

「勝った・・・つもり・・・？」

再生不能なまでに燃やされた腕の炎は役目を果たしてすでに消えて
いるが、今だ全身に飛び火したそれは苦痛を与え続けている。
手が動かない今、水遁は使えない。

この炎を消すことは出来ない。

（まずいことになったわ・・・）

形勢逆転だ。

「・・・あなたを拘束するまでは、勝ったとはいえません」

途端、白光が強くなった。

ぎりりと大蛇丸は齒を食いしばった。

「本当なら・・・あなたなど今すぐに殺してしまいたいですけどね」

「・・・」

「俺は里長ですから」

どくどくと流れる血を、ただ傷口を手で押さえつけるだけで気にも止めず射抜く眼光は異常なほどの威厳を含み、目に見えない圧力を与えてくる。

精悍な顔立ちの凄味は息をつめるほどに目映い。

自分の捨てた里を、この男は己のすべてをもって守ろうとしている。

なんと美しい出で立ちか。

(・・・この力といい、本当に惜しい子・・・)

白炎を一度ちらりと見て、大蛇丸が忌々しく息を吐き出した時、ドオン！という凄まじい地響きと、バキバキと何十本という木が薙ぎ倒される音が響き渡った。

「何だ・・・？・・・！！！？？」

音の中心に目を向けた四代目は言葉を失った。

(あれは・・・)

里の領内の北部の森に白みを帯びた黄に、黒で鱗のような模様を全身に配した巨大な何かが出現していた。

それはかつて自分が対峙した九尾によく酷似していた。

確かあれは・・・。

そう思考することに意識が沈んだとき、ずぶりと嫌な音がして、右肩に激痛が走った。

「っ！？」

「・・・全く、」

慌てて振り返ると大蛇丸と自分の間に見たことのある者が立っていた。

「……薬師・カブト……」

「さすが火影様。下っ端下忍なんかの僕の名前をご存じとは」

眼鏡の奥で黒い瞳が妖しく笑んだ。

「里の住民の顔と名前ぐらいちゃんと記憶してるよ」

四代目は空いてる方の手で肩に刺さったクナイを抜き取ると構えた。

すでに大蛇丸に絡みついた炎は消されている。

自分が目を離している少しの間に、気力が欠けているとはいえ自分に気づかれずここまで来て、そして炎を消し、自分にクナイを放った。

（音隠れのスパイって事かー。だまされっぱなしだなー）

思わず苦笑したら、喉がひきつき血の混じった咳が出た。
気力で痛みは麻痺しているので大して傷は気にならなかったが、肉体的には限界のようだ。

（ちょっと身体を張りすぎたかな）

そう反省したとき、自分と呼ぶ声が聞こえた。

「火影様!!」

屋根の上に飛んできた影が四代目を庇う位置に来て、斜けた額あてに手をかける。

四代目は妙にはしゃいだ声で話しかけた。

「やっぱ日頃の行いがいいといざって時に強いよね」

「んな事言っんなら出血多量で死なないでくださいよ。・・・全くだんな戦い方したらそうなるんだか」

「あつなにその言い方!!それが先生に対する物の言い方!?俺は君をそんな子に育てた覚えはないんだけどなあ」

「火影ともあろう者が捨て身で戦ってどうすんですか！生徒として情けないですよ」

（ある意味この人たちタフだよな）

ぎゃあぎゃああと騒ぎ合う四代目とカカシにカブトは肩をすくめると主君を振り返る。

大蛇丸は青白い顔をさらに紙のように白くしていた。

「肩を貸しなさい。……退くわ」

ふらりと立ち上がった大蛇丸を担ぐように腕をまわすと、カブトは印を結んだ。

次の瞬間ボン！という音と白い煙に、口論していた2人がそちらを振り返った頃にはすでにカブトと大蛇丸の影はなかった。

「逃がさないよ」

「おおっと、カカシストップ！」

気配を辿り、印を結び始めたカカシを四代目は止めた。

「どうせしばらく動けないだろうからほっといていい。今は里の復

興が最優先だ」

緊張が解けたためにゲホゲホと咳き込み、その場にうずくまってしまいながらも里を心配する相手に力カシは眉を下げた。

「ここに来る前に医療班に声かけてきましたからもうしばらく辛抱してください」

「そう。・・・ちょっと無茶したかな。・・・ところで、あれ」

そう言っただ代目が目で差したのは、ここからは離れているとはいえとてつもない大きさだとわかる尾獣化した我愛羅だ。

「風影君の次男坊の・・・確か我愛羅くんだよな？」

「おそらくは・・・。九尾以外の尾獣をみたことがないのでなんともいえないですが・・・」

「俺も一尾をみるのは初めてだけど、間違いない。尾獣化は・・・うーん、どうも完璧ではないようだけど、それでも相応のリスクがあるはずだ。早くなんとかしないと・・・っわー!!」

突然響いた地響きに四代目は口を閉ざさすにはおれなかった。

地響きの規模はさきほどと同じくらい。

反射的に森を見た力カシと四代目は驚いた声を上げた。

「ちよっ・・・!!?」

「ブン太さん!?!」

びっくりして四代目はかすむ目に力を込めた。

（頭の上に誰か居る。．．．先生？．．．いや）

蝦蟇仙人と異名をとる自分の師が、今里帰りをしている。

けれどその彼はイタチの斬った蛇の上に蝦蟇を喚び、敵を防いでるところのようだった。

そうすると――。

誰かわかった四代目の横で、左目を凝らしていたカカシが目を見開いた。

あの子を、見間違えるわけがない。

風にたなびく金の髪は幾千の絹糸のような、黄色と青の忍者服を纏った彼女は自分の好意を一心に集める少女に違いなかった。

「ナルト!!??」

「ここだ」

カカシが叫んだのと同時にカンカンと瓦を踏む音がして白い衣服を着た数人がわらわらと四代目を囲んだ。

「ん、イタチ、ありがとう」

「火影様．．．無茶をなさいましたね」

白い顔でひらひら手を振る四代目をイタチは何ともいえない目をし

つつ頭を下げて、放心しているカカシに訝しげに声をかけた。

「・・・カカシさん？」

「何で・・・何でナルトがあんなところにいるんだ・・・」

「あのねえカカシ・・・」

「ちよつと火影様！話さないでください！！血が止まらないでしょう！」

そう医療班の人間から声が飛んだので四代目は「ああ、すまない」とおとなしく口を閉じた。

「全く・・・よくこんな傷でお話ができるものです・・・とにかく出血がひどいですからもう動かないでください」

四代目の傷口に手をかざしていた彼はそう諫めると手の光を強くした。

その間に他が手分けして、ほぼ全身に治癒を施している。話すな、動くな、と言われてもねえ、と四代目はカカシを見た。

「君がサスケに浮気してる間、ナルトは自来也先生に弟子入りしてたんだ。蝦蟇を口寄せしたっておかしくないよ」

「俺は浮気なんかしてません！！」

「カカシさん、論点はそこではないでしょう」

イタチのつつこみが空しく響く中、守鶴とガマブン太は、腹太鼓を叩くわ、飛ぶわと実に大規模な戦闘を始めていた。それをしばらく見つめていた四代目は眉を顰めた。

（ナルトかなりバテてるな。呪印つけたままなのか？）

ガマブン太の頭にへばりつくようにしているナルトはかなりいいっぱいだ。

けれど、彼女としては何がなんでも一尾を止めるつもりだろう。呪印があつたとしても、きっと関係なく向かっていくはず。だから心配なのだが。

（ブン太さん、ナルトの事気に入ってるみたいだからちゃんと守ってくれるだろうけど・・・）

念のため、と四代目はイタチを振り返った。

「イタチ、悪いけどナルトの援護に行つてやつて。ナルトのことだからきつと大丈夫だけど・・・」

「はい」

頼んだよ、と笑んだ四代目にイタチは頷くと、どーん、ずどーん、ばしゃあーん！と凄まじい現場へと向かつていった。

さして疲れも見せず木の上を飛んでいく後ろ姿に、「若いっていー

なー」とぼやきつつ四代目はいささか不服そうだが命令には従いそうな力カシを見上げた。

「さて、俺たちも動こうか。まず・・・そうだね」

すっと笑みを消し目元を引き締めた火影に力カシも気を引き締め言葉を待った。

闘技場のみならず、里の全土でいくつも戦火が上がっている。

「木の葉は最強の里だと証明してやろうじゃない」

四代目は高らかに言った。

「複雑な命令は必要ないね。・・・敵意の見られる忍を手加減無しにすべて片付けてくれ。俺はここにいるから何かあったら報告よろ

「し
く
」
「了
解
」

身体が鉛のように重くて、とつさに頭突きしかできなかった。

視界が割れる中、しだいに小さく見える我愛羅から砂のチャクラが消えていくのが感じられた。

（・・・なんとかなっ たってば・・・）

そう安堵してゆるく瞼を落とした。

守鶴の消失と同時に親分も消えて、自分がとても高いところから地面に落下しているのはわかったが、もう全身くたくたで、着地をとる気力などなかった。

だんだんと近づいてくる地面を他人事のように見つめる。

・・・あ・・・ぶつかる・・・っ・・・

そう思った瞬間、はたして全身を打つてであろう痛みは永遠に襲ってこなかった。

あれ、と閉じていた瞳を開けてナルトは驚いた。

「・・・イタ・・・チ・・・さん？」

自分を抱き留めている相手を見上げて出た声はとても掠れていた。イタチは眉を顰めて、今にも再び閉じてしまいそうな青い瞳を静かに怒る。

「・・・無理を・・・しすぎだ」

抱きしめたまま自分に寄りかけられるように肩を抱くと、イタチはナルトの左手首に巻かれた布を解いた。

そこには呪印がくつきりと紋様を見せている。呪印が解かれていない証しだ。

ナルトに施された呪印は、ただ漠然と彼女のチャクラを塞き止める。

術は両手で印を結ぶことで初めて形になるもの。

左右の手から放出されるチャクラのバランスが悪ければ術の発動スピードも遅くなるし、正確性にも欠ける。

ナルトの場合、左手からのチャクラの流れが呪印で異常に少なくなるためにそれを補おうと右手に力が集中、チャクラも必要以上に消費という効率の悪い事態が起こる。

そのためいくらナルトのチャクラスタミナが常人の数十倍だといっ

てもとてもバテやすいのだ。

故に、呪印をつけた状態でチャクラの限界を迎えるのは非常に危険だというのに、彼女は呪印を解除せずに守鶴と戦った。それは自殺行為に等しい。

よくよく見ると、彼女は身体能力を抑えるための負荷装備もつけたままだ。

今解いた布にはずしりとイタチでも重く感じるシート状の砂重りがはさまっているし、きつと彼女の右手、両足にも似たような負荷装備を付けているだろう。

暗部での任務を終えた時、彼女が着替えたついでに装備を付けている場面は何度も見ているのでそれに違いはないのだが……。

これでは彼女の俊敏さの真価の数分の一も発揮できはしない。
イタチは唇を噛みしめた。

「…………お前は…………どうして…………」

自分を省みずに他人のために命を懸けるのだ。

そう見つめるイタチに、ナルトはゆつくりと微笑んだ。

「・・・守りた・・・いからに・・・決まってるってば・・・よ」

仲間だけでなく里の人みんなを守りたい。

「私は・火影に・・・なるんだから・・・」

にししと笑うナルトにイタチは苦笑した。

「・・・全く敵わない・・・」

でも、もう少し心配するこつちのことも考えてくれ、と汗と血で額に張り付いた髪をどけてやりながらつぶやいて、イタチはふと数メートル離れた所に倒れている少年を見やった。

先ほど暴れていた狂気が嘘のように静まっている。

イタチにつられてナルトも目だけを動かして様子を見た。

彼は落下しながらも砂が周りを取り巻いていたので地面に直撃はしていないはずだ。

我愛羅は仰向けに倒れ、うすく目を開いてただ空を見ている。

その空は、戦いとは無縁にどこまでも青く澄んでいる。
それと同じ色彩の目を一瞬歪めると、ナルトはイタチを呼んだ。

「あいつのところに・・・つれてってほしいってば・・・」
「ナルト？」

訝しげに細められる漆黒の双眸をナルトは無言でじっと見返した。
何秒か後、イタチはため息をこぼした。

「・・・わかった」

ナルトを抱き上げると戦意の欠片も残っていないような我愛羅のそばにナルトを降ろした。
ちよこんと座ったナルトの気配に気づいて、けれどじろりと我愛羅は彼女を睨んだ。

「・・・なんだ・・・」
「・・・」

ナルトは答えない。
無表情に我愛羅を見つめるばかりだ。

「おい・・・」

ナルトの不可解な行動に声を荒がせると、ナルトの表情が動いた。

花が綻ぶようにやわらかい笑みを我愛羅に向ける。

「また、私と戦ってほしいってばよ。敵としてとかじゃなくて修行の一環っつーか・・・お前強いから組み手の相手とかしてくれるだけでもいいからさ!」

我愛羅の双眸が微かに見開かれる。

「何だ・・・それは・・・」

「とにかくまた会おうってば。サクラちゃんとサスケにも会ってほしい。木の葉と砂がぐちゃぐちゃしてんだなってよくわかったけど・・・このままごたごたで済ませるのはよくないってばよ」

な?と大きな瞳が輝く。

ツキン、と胸の奥が痛んだ気がして、我愛羅は押し黙ってしまった。

面食らったというほうが正しいかもしれない。

「お前は・・・何を言っている？」

こんなのは嘘だと今までの経験が告げるが彼女の青い瞳の真剣さがそれを揺るがせる。

「このままお前と会えなくなるのは駄目だと思っただってばよ。だから、ちゃんと話せる時間がほしいというか・・・その・・・」

ナルトの寂しそうな弱々しい声にまた胸が痛んだ。

期待している自分がいる。

これは・・・受け入れていいのだろうか・・・？

何年も忘れて・・・考えないようにしていた感情だった。

けれど、

(・・・受け入れたい・・・)

彼女のみせてくれた、あの笑みに、偽りなど感じなかったから。

知らず自分の唇が動くのを感じたが嫌じゃなかった。

「・・・わかった・・・」

「えっほんとだってば!？」

「・・・ああ」

反射的かもしれなかったが、我愛羅は不思議と心が落ち着いているのに気づいた。

この痛みは不快じゃない。

そう我愛羅が胸を押さえて瞳を閉じた時だった。

「我愛羅!!？」

がさりと音をさせて木々の間からテマリとカンクローウが現れた。

二人は一瞬ナルトとイタチの存在に息を呑んだようだったが、イタチがナルトを抱き上げて我愛羅から離れたまま動きがないのを感じ取ると、我愛羅をつれて再び木々の中に消えてしまった。

「ナルト」

完全にテマリたちの気配がなくなってからイタチが声をかけると、彼女は「降りて良い？」とふらふらと身体に力を入れた。

「もう動けるのか？」

「しばらくじっとしてたから」

そうか、と降ろせば、ナルトはちゃんと自分の足で歩けるほどになっていた。

そして「さて！」と仲間がいるであろう方へと顔を向けた。

「サクラちゃんとサスケとパックスを迎えに行くつてばよ！」
(全く、敵わないな)

イタチは微笑を浮かべて、小さい背中の後を追った。

枝を離れた葉は風に乘って、遠くどこまでも飛んでいく。
ときにひらりとまわってはどんどん飛んでいく。

火の意志は生きている。
そうして育っていく。

四代目は空の眩しさに目を細めながらも、遙か続く天を見た。

「木の葉はそう簡単にならないよ」

火の粉となって。火花となって。そうしてすべてを大きく包む炎と
なつて。

それに、もし火の意志はもし消えたとしても、すぐに誰かがつけて
くれる。

自分が育つた里、受け継いだものは、そういう誇りだ。

（ねえ、あの子は自分の力で里を守ったよ・・・）

どれだけ里の者に蔑まれても、彼女は自分を信じて、がんばって――
――。

今日、彼女は間違いなく英雄になった。
きつとそれは里に伝わる。

伝わってほしい。

少しでも、何かが変わってほしい。

いや、変わるよね。

四代目は、晴れ渡る空に、そっと微笑んだ。

葉よ盛れ2（後書き）

初代と二代目が弱すぎないか？というご意見は、私も充分持つて
いているいろいろ考えましたがこうにしかできなかったなのでご容赦くだ
さいませ。

星の降る（前書き）

創作です。

このあたりから私のオリジナル世界に入ってます。

木の葉崩しのあと、慰霊祭とかあってもいいんじゃない？と書いたものです。

カカシ先生が残念なことに・・・！！ごめんなさいいいいいい。

星の降る

西の空、山間が茜に染まり火影岩に夕日の光が照る頃、木の葉隠れの里は厳かな、だがひしひしと歓喜の湧く雰囲気満ちていた。

数日前、木の葉の里は砂、音の里による襲撃を受けた。

幸い火影の健在なる力と、里の住民の迅速な行動で被害は最小限に食い止める事ができた。

首謀者が大蛇丸である事もわかり、砂隠れの里との和解を成し遂げることができた。

だが完全に無傷というわけにはいかなかった。

「・・・慰霊祭か」

死者の魂を讃えると共に慰め、そして生者の祈りのための祭。

厳密にはこうなのだが、最終的にはお祭りのようになってしまう。

屋台が出て子供達はしゃいで走り回り、花火が上がる。

今日の祭は生者の勇姿を讃える意味合いもあるので、木の葉を下る川に白い菊を流したら後は宴となるだろう。

戦に関わる生活をしていると生きていることに宴を開くのは仕方がない。

四代目は書類を机にほおると、夏の終わりが近づき、心なしか冷えてきた夜風の入る窓へと近寄った。

眼下に広がる大通りに点々と灯る赤い提灯に目を細める。

「少し平和になったと思ったたらこれだもんな」

ふうー・・・と息をついて四代目は肩を竦めると窓を閉めた。

太陽が沈んだ時、黄昏の終わり目。
それが祭の始まるの時。

火影である自分がないのはおかしいだろう。

四代目は身につけている白装束を一度撫でて部屋を出た。

「ちょっと待っててばよ!！」

冷や汗をだらだら出して後ずさるナルトに、だがサクラはじりじりと詰め寄った。

「待ったなし!・・・いの!用意はいいわね・・・」

「当たり前でしょ!ナルト、あとはあんただけなんだから、観念しなさい!」

「・・・絶対これナルトちゃんに似合うと思う・・・」

答えたいのとヒナタもじりじりと詰め寄ってくる。

いつしかナルトは後退できなくなった。

理由は簡単。

後ろが壁でもう動けないのだ。

前方からは妙なオーラを漂わすサクラといのとヒナタが迫ってくる。

ナルトは必死に叫んだ。

「だーかーらー何で私がっ!!」

3人に同時にがばり!と肩口を掴まれてナルトは悲鳴を上げた。

「何か騒がしくないか？」

そう言つてキバが見上げたのはナルトの家であるこじんまりとした木造家の二階だ。

さつきから何回もいくつかの影が彼女の部屋の窓を横切っているの
で部屋の中からの電気の光がちかちかとして見える。
それを下忍の男衆は呆然と眺めていた。

慰霊祭には下忍の自分たちも出席する。

どうせ行くならみんな一緒に行こうとサクラかいのが言い出したのはいいものの、ナルトの家に集合してからすでに30分は待たされている。

女衆を置いて先に行ってもいいのだが後でどうなるかわかったものじゃないのでそれも出来ない。

「ったく何してるっつーんだ。時間かかりすぎだろ」

いくら忍でも忍耐力には限界というものがある。

刻限が迫っているのなら尚更だ。

待たされることに慣れているサスケだったが、もたれていた塀から身体を起こすとスタスタと玄関に向かった。

「呼びにいくのか？」

赤丸を頭に乗せてついてきたキバにサスケは頷いた。

「無駄に遅れる必要はない」

言いながらインターホンを押すと、意外にもすぐにばたばたと足音が聞こえた。

「はいはいお待ちせー！」

「ごめんねー着付けできるのがヒナタだから思ったより時間がかっちゃって」

謝りながら戸を開けて出てきたいのとサクラにサスケとキバは目を見開いた。

門から覗いたシカマルたちも同じような反応をしている。

「お・・・お前ら・・・何で浴衣なんか着てんだよ・・・」

そう、2人は浴衣を着ていた。サクラは退紅の地で袖先や裾に白い花の絞りのものを、いのは菖蒲色の地に所々に撫子が染められたものを着ていた。

2人ともかわいらしく髪を結って簪をさしている。

普段の印象とはがらりと変わった2人にキバが思わず指を差して言うというのがポーズをとって答えた。

「どうしてってお祭りだからに決まってんでしょ！ここ最近戦闘ばつかで全然女の子らしい事してなかったんだからいいじゃない」

「お前肝心な時に寝てたじゃねーか」

「シカマルうるさいわよ」

「そろそろヒナタたちも降りてくると思っけど・・・あつ来た来た」

「・・・遅れてごめん・・・」

少し駆けるようにして廊下を歩いてきたヒナタにキバは固まってしまった。

「ひ・・・ヒナタ？」

薄紅の地に手鞠の柄を散らした浴衣は色の白い彼女にとっても似合っていて可愛らしい。

「かわいいーでしょ。やっぱりヒナタって昔から着物とか慣れてるから着てもしっくりくるわよね」

どう？とサクラがキバのほうにヒナタを押しやってやると瞬時にキバの顔に朱が差した。
それを微笑ましく見ながらもサクラといのはきっ！と家の中を覗いた。

「ナルトー！！せつかくヒナタに浴衣貸してもらって髪もセットしてあげたんだからさっさと出てきなさい！！」

「・・・ナルトも？」

サクラは楽しそうに笑むと家の中に入っていった。
サスケはごくりと生唾を飲み込んだ。

ほどなくしてずるずると引きずられる音と特徴のある声が耳をついた。

「・・・恥ずかしいってばよ」

「何言ってるの、可愛いわよ?」

「可愛いわけないってばよ・・・あ・・・何か足がすーすーするってばよ」

「文句言わないの。ほら!」

カラコロという下駄の音と共に外に追いやられてきたナルトはまるで別人だった。

群青の端々に繊細に散らされた白と金の花が可憐な浴衣に垂れる金

糸。

高く結わえて瞳と同じ色彩の蜻蛉玉の簪をさしてあるが、ほつれさせた髪がどこか大人っぽい。

言葉を失って呆然と見つめてくるサスケに、それが見惚れているのとは露知らず、ナルトは仏頂面で唸った。

「何見てるんだってばよ」

「・・・お前・それで祭に行くのか?・・・」

「自分でも似合っていない事ぐらいわかってるってばよ!わざわざ言うなんて、ほんとやな奴だってばよ」

「いや、そうじゃなくて・・・!」

(そんな格好で行ったら襲われるだろうがっ!!!)

かあつと熱くなる顔に手をあててサスケは踵を返した。これ以上見ていたら感情が表に出かねない。

だがナルトにはサスケの心境などわかるはずもない。

背を向けたサスケにナルトは眉尻を上げると手に提げていた巾着を思いつきサスケの後頭部にぶつけた。

反射的にサスケは振り返って怒鳴った。

「・・・！っ・・・てつめえなにしゃがる！」

「・・・・恥ずかしいの我慢して出て来たつてのに・・・何で黙るんだってばよ！・・・・サクラちゃん、ごめんやっぱ着替えてくる」

「ちよっ・・・ナルト！」

「このウスラトンカチがっ！早合点するな！！」

サクラが捕まえるより先にすばやく腕を伸ばして華奢な手首を掴むと、サスケはナルトが自分のほうを見るようにひっぱり、伏し目がちになりながらもちゃんと言った。

「・・・・似合ってる」

「・・・え？」

「見慣れないから驚いたただけだ」

最後はそっぽを向きながらだったが、ちゃんと答えてくれたサスケにナルトは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとうっつてば」

「！っ・・・もっ・・・もう時間がない、行くぞ！」

視界の端とはいえ間近でナルトの笑顔を見てしまい瞬時に顔を赤くしたサスケは彼女の手首を掴んだままずん歩き出した。それについてぞろぞろと他の面々も大通りへと歩き出す。

「えっちよつと・・・！」

「いざ祭へレッツゴー！！！」

「お前もうちよつと祭の意味考えたほうがよくねえか・・・？」

シカマルの言葉が空しく響く中、雛子の音が空に響き始めていた。

手から離れた白い花弁が微かに散って夜の闇を身に宿した水に浮かんだ。

川にはすでに数え切れないほどの花が流れている。

提灯の明かりで照らされた表情は無のままに、イタチは静かに川を流れる滴型の白い花弁を見つめた。

「うつわー・・・すごい数・・・」

後方から砂利を踏む音が聞こえて少女特有の高い声がした。

他にも数人の子供が話す声がしてそちらを横目で見ると、薄紅の髪が鮮やかな少女が面々に花を配っていた。

・・・よくよく見れば見たことのある顔ばかりだ。

1人1人確認するように視線をやって、そしてはたと集団の一番後ろの所で目が止まった。

「……ナルト？」

漏れた声に全員が一齐にイタチを見た。

明らかに驚いている様子を見ると、自分の存在に気づいてなかったようだ。

普段のくせで知らずうちに気配を絶っていた自分をおかしく思いながらも関心はすべて1人にだけ注がれていた。

「えっ！イタチさん？……わっー嘘っー！！」

ナルトは急に慌て出すとそばにいたサスケの影に隠れた。

イタチが柳眉を顰めたのは言うまでもない。

砂利を跳ねさせながらナルトに近づくと、睨んでくるサスケには目もくれずに彼女をひっぱりだす。

「どうして隠れるんだ」

「えーいやー……その……」

「兄貴、ナルトにさわんなっ……もがっ！？」

サスケがナルトをそばに寄せようと腕を伸ばすが後ろから恐ろしい速さで伸びてきた手に阻まれた。

「はいはいサスケ君、私たちは向こうで花流して来ましょ！ね？」
「ふおい！ひゃくら！（おい！サクラ！）」

サスケが藻掻くがサクラはびくもしない。
日常ではありえないサクラの行動にナルトは目を白黒させた。

「さ、サクラちゃん？」
「ナルト、私たち向こうに行って用済ませたら先にお祭り行ってるからあんたも来なさいよ。あっナルトの事お願いしますね」
「・・・あ、ああ」

サスケの口を塞いだサクラは有無を言わせない笑みをイタチに浮かべると、ずるずるとサスケを引きずって、いのに誘導されて移動している他のメンバーについて川上へといそいそと行ってしまった。

（どこで知り合ったのか知らないけど・・・なんだか恋の予感って

感じ！！チャンスよナルト！！）

内なるサクラがゴーゴー！と拳を上げた。

しばらく呆然とサクラたちの後ろ姿を見ていたナルトだったが、
気まずさに持っている目を伏せてしまった。
睫の影が提灯の明かりに揺れている。

イタチは目を細めるとそつとナルトの手に触れた。
ひんやりとした手にナルトが驚いて顔を上げると、イタチは少し顔を
傾けて微笑んでいた。

「弔いに来たのだろうか？」

「う・うん」

頷いたのを確認して、そのまま小さな手をとって川縁につれていく
と、ナルトはしゃがんで花を水に浮かべた。
水面に浮かぶ白い花筏をみていると、何とも言えない気持ちに胸が
詰まる。

水に指先を浸すと刺すような冷たさが伝わってきて、溢れそうに
なったものが引っ込んだ。

それに安堵してナルトは立ち上がった。

イタチの前で泣くのは、気がひけた。

泣いた事はあるが、やっぱり恥ずかしい。

ただでさえ今日はこんな格好をしているのだ。

それだけで顔から火が出そうなくらい恥ずかしいのに泣いてしまっ
たら面子も何もない。

立ち上げてなお水面を眺めるナルトの横でぽつりとイタチが呟い
た。

「綺麗・・・だと思うのは不謹慎なんだろうな」

「えっ・・・」

弾かれたようにイタチを見上げると、彼はさきほどの自分と同じように水面を見ていた。

闇夜の川の、点々と提灯の赤い光が反射してきらきらとした水面を真っ白な花弁を広げた菊が流れていく様は、とても悲しい儀式なのだがどこか神秘的で、確かに美しい。

ぼうっとそれに見とれたナルトはだが慌てて俯いた。

（なっ何考えてるんだってばよっ・・・私の事なわけないってば・・・）

かあつと自分の都合の良さに顔が熱くなる。

そつと浴衣の袖を持ち上げてそこに散らばる花に目を落とした。

（可愛いけど・・・私には合わないってばよ・・・サクラちゃんとかが着た方が絶対似合うってば）

はあ、とため息をつく、横で砂利が鳴った。

「ナルト」

「・・・ん？」

顔を上げるとすつと頬に手がそえられた。
びっくりしてナルトは目を見開いた。

「い、イタチさん？」

「見違えた・・・とてもよく似合っている」

えっ？とナルトは瞬きを繰り返した。

時が止まってしまったようにただ遠くに水の流れる音と、自分の心臓の音がやかましく聞こえた。

ナルトは満面の笑みを浮かべた。

「・・・あ・・・ありがとうっば」

やっと絞り出した声は上擦っていて、イタチが短く笑う声が聞こえた。

「今日はどうした。いやにしおらしいな」

「そっそんな事ないってばよ！」

「そうか？俺にはそう見えるが」

「単に浴衣が着慣れなくて・・・だからっ・・・っうあっ・・・!!」

いつも通りだとはしゃいで見せようとしたナルトだったが、無理に

駆けたせいで砂利につまずいてしまった。
通常なら足を一歩踏み出せばいいのだがいかんせん着物なので大きく足を開けない。
倒れそうになったナルトをイタチは難なく受け止めると意地悪く笑んだ。

「お前の言うとおり、いつものお前だな」
「うーっ……」

立たせてやると、ぷいっとナルトはそっぽを向いてしまった。
その様子に苦笑する。

「……何笑ってるんだってばよ」

睨んでいるつもりなのだろうが、それさえも可愛くて、イタチは何とかにやけるのを抑えると気をそらそうと話題をふった。

「そっいえばお前、祭に行くのか？」

川沿いに生える木々の向こうを指して聞くと、ナルトは寂しそうな表情を見せた。

「……ナルト？」

「私は・・・行けないってばよ。みんな嫌がる」

まだ幼い頃、一度だけ父と祭に来たことがあったのだが、周りの誰もが自分に冷たい眼差しを向けてくる恐怖感だけが思い出として残っていて、ナルトにとって祭はあまり嬉しくないイベント事だった。

視線を外したナルトの横顔を見つめたままイタチは眉を顰めた。

（・・・・ここでも九尾か・・・どこまでナルトを苦しませれば気がすむ）

イタチは忌々しげに雛子の聞こえるほうを睨んだ。

里の人間にも、九尾自体にもえもいえない怒りが湧いてくる。

元々花葬を済ませたら帰省するつもりだったイタチだったが、ナルトの手をとると歩き出した。

「えっ何・・・？」

「春野サクラだったか、彼女が祭に来いと言ってただろ。行くぞ」
「ちよっと待っててば！ほんとに駄目だってばよ！私何かが行ったら・・・」

引かれる腕に力を込めると、イタチが突然止まった。
肩越しに漆黒の瞳をナルトに向ける。

「俺と一緒にいる。・・・無責任なことをしようとしてるのはわかってる。でも、何か言われても、俺が守るから」

そうして持っていた手を握り直すと、イタチは再び歩き出した。

しばらく哑然としていたナルトだったが、何度かイタチの横顔と手とを見比べると、そつとイタチの手を握り返した。

動いたぬくもりに驚いた目を向けると、ナルトがはにかんだ笑みを浮かべ、小さく「ありがとう」と言った。

イタチは微笑み返すと提灯の並ぶ大通りへと目を向けた。

満天の星空の下、2人を迎えたのは色鮮やかな屋台の壁と賑わいをみせる人の波だった。

「つかーっうまいのう!」

「先生飲み過ぎですよ」

「うるさいのお。こういうときはどーんと吞ませんか」

どん!と持っていた杯を置いて自来也は弟子を睨んだ。

当の弟子は知らんふりを決め込んでいか焼きを口に運んでいる。

一番に花葬を済ませた2人は屋台の一角に設けられた休憩所で酒を酌み交わしていた。

一方的に自来也だけが酒を仰っているが、四代目も心なしが目元を赤くしている。

酒に弱くはないが、普段飲まないせいかわりが早いようだ。

「ん?なんだあれは・・・」

ふいに自来也が立ち上がって目を凝らした。

「どつしたんです?・・・んん?」

くるりと後ろを向いた四代目は目を剥いた。

前方から綿菓子やら輪投げの景品やらが歩いてくる。
否、持ちきれないほどのそれらを抱えて誰かが歩いてくる。
体格から見るに子供なのだが、荷物で顔が見えない。
ふとその隣にいる人物を見て四代目は驚嘆の声を上げた。

「イタチ何やってんのー？君が祭に来るなんて珍しいねー」
「火影様・・・」

四代目にイタチは気づくと、前が見えなくてふらふらしている隣の肩を抱いて2人がついているテーブルの所まで連れて行った。

「おろしていいぞ」

その言葉にどばーっと荷物がテーブルに雪崩れ込んだ。
とっさに自来也が酒やらつまみやらをどけたのでテーブルが汚れる事は免れたが、荷物から顔を出した人物に思わず酒瓶を落としてしまった。

「くはーっ疲れたってばよー」

「ナルト!？」

「ええっ!!何!?ナルト?ってその格好なに!？」

「あ、お父さんにエロ仙人だってばよ」

ナルトは紅潮した顔で微笑むと、空いていた椅子にイタチと並んで

座った。

「浴衣はヒナタが貸してくれたんだってばよ」

「えーそうなの！・・俺・・そんな着るなんて一言も聞いてない・・
・！うわー、カメラ持ってたらなー！」

「こら馬鹿弟子、落ち着け。確かにナルトの浴衣姿は可愛くて制作意欲が湧いてくるが、今はこの大量の食いもんやら景品やらのほうが先だろうに」

ナルトの抱えてきた物を物色しながら自来也は言った。

「あつそれもそうだ。これどうしたの。戦利品？」

「うっん、全部貰ったんだってばよ」

荷物の山からニツキ水を出して飲みながらナルトはこれ以上ないほど嬉しそうに笑った。

「貰った？これ全部？」

「そうだってばよ」

『あんだらる？蝦蟇を口寄せしてあの砂の化け物と戦ったの』

大通りに入るとすぐに1人の女性が屋台の中から声をかけてきた。反射的にびくりと身体を震わせたナルトを背に庇い前に出たイタチに一瞬目を見張ったようだったが、女性は自分の屋台で売っていた綿飴を差し出した。

『……その……ありがとね。里が襲われた時、避難小屋にいたんだけどさ。あんたが戦ってくれなかったら今頃どうなってたか……』

『避難小屋……？ああ、我愛羅の時……ってえっと……？？』

拍子抜けしたナルトは初め戸惑っていたが、イタチの影から顔を出す、おずおずと女性に近づいた。

『お礼って言っちゃあれだけど、どうせだから貰ってっておくれ』

『……私が貰っちゃっていいんだってば？』

『ああ』

『あ……ありがとってばよっ！』

ナルトが満面の笑みで答えると、女性も曖昧にだが微笑み返した。

それからは一歩進むごとに誰かしら声をかけてきて、皆が皆同じ理由でナルトに屋台の品を渡していった。

お礼だと言つて渡すのは女性ばかりで、皆避難小屋でナルトが戦う所を見ていたのだという。

「・・・・・・・・」

四代目はじんわりと目の奥が熱くなるのを感じた。

「・・・・・・・・うわ・・・」

堪えきれず目から溢れた涙を四代目は慌てて拭った。

ナルトに気づかれないように顔を隠して何度も目元を指でこすった。

（・・・・・・・・気づいた・・・変わってくれた・・・？）

12年間頑なにナルトの存在を認めなかった里の人間が、ナルトの戦う姿に考えを変えようとしている・・・？

「……良かったな」

ぽんぽんと肩を叩かれたので少し赤くなつた目を向けると、自来也がにいつと笑っていた。

「期待して……いいんでしょうかね……」

掠れた声でつぶやいて、そつとナルトへと視線を流した。
彼女はイタチに屈託ない笑みを向けながら貰つた物をなにやら分類しているようだった。

その光景に頬を弛ませて、自来也は足下に立ててあつた新しい酒瓶を出して、四代目の杯に酒をついだ。

「心配ないだろ。木の葉の里も捨てたもんじゃないってことだ。……でも……なんだ。女はやっぱ強いな。男ならびびって何もできないからかう」

自分の分もついで、自来也は輝いている青い瞳を見返した。

「……そうですね」

かちん、と音をさせて、喉が焼けるようなそれを一気に飲み干した。

ずっと胸の奥にあったもやもやが少しはすっきりしたような気がして笑っていると、ナルトが不思議そうに見つめてきた。

「2人共何で笑ってるだつてばよ」

「何でもないよ。ちよつとね」

「ちよつとつて何だつてばよ！隠さないで教えてくれつてばよっ・
・つてつうわっ！！」

食い下がろうとしたナルトだったが突然背中にタックルを食らってテーブルに突っ伏してしまった。

「ナルルト！！ここにいたのね」

「・・サクラちゃん・・ひどいってばよー」

ぶつけた鼻をさすつて振り返ると、サクラが「ごめんごめん」と言いつつもにこにここと笑っていた。

彼女の後ろには川のところで分かれた面々がいて、四代目や自来也に挨拶をしていた。

唯一サスケだけはイタチと睨み合っていたが。

「で、どうなったのよ」

小声で囁かれた言葉にナルトは首を傾げた。

「どうなったって・何がだってば？」
「は！？もしかして何もなかったの？」
「だから何がだってばよ！！」
「告白されたとか、キスしたとか・」
「！！؟؟・こっ・告白！？きつ・・・・キス！？」
「ナルト？」

突然ナルトが叫んだのでイタチが顔を向けると、彼女はこれでもかと顔を真っ赤に染めてぶんぶん首を振った。

「なっ・何でもないってばよ」
「そうか？ならいいが」

とりあえず納得したのかイタチはサスケに視線を戻すと吐き捨てるように言った。

「・・・サスケ、いい加減にしろ。鬱陶しい」
「それはあんただろうが。ナルトを連れまわしやがって、一体どういっつもりだ」

とごたごたサスケが騒いでいるのを尻目にサクラはため息をついた。

「・・・何にもなかったのね。なあーんだ、せっかく2人つきりに

してあげたのに」

「サクラちゃんの考えてる事がわからないってばよ。何で私とイチさんがそゆ事するんだってばよ」

「・・・あーもういいわよ。あんたがとことん鈍い事がよくわかったわ」

「??」

全く・・・と額に手をあてるサクラの様子に苦笑しながら、ひよこりとヒナタが顔をだした。

「ナルトちゃん、花火見に行かない？ここでも見えるけどもう少し上に行ったほうが綺麗に見えるから・・・今からみんなで行くって話してたの」

「行く！花火見たいってばよ！！イチチさん！花火見に行こうってばよ！」

「花火？いいよ」

イチチは返事を返すとサスケをどけるようにして立ち上がった。

成り行きが面白くないサスケは舌打ちをするとぷいっとイチチから顔を背けた。

「サクラちゃん、2人も行くって」

「よしけってーい！ほーらみんな移動するわよー。移動ー！」

とサクラが意気揚々と出発しようとした時だった。

「サクラ、ちょっと待って！」

いのが慌てた声を上げてサクラに駆け寄ったのだ。
何？と首を傾げる彼女にいのは前方を指差した。

「あの猛スピードで走ってくるのってあんたたちの担当上忍じゃないの？」

「え、カカシ先生？」

思いもよらぬ人物にサクラはいのの差す先に目を凝らした。

「あれ、カカシ先生だ。何で走ってるんだろ」

確かに前方から白くも見える銀の髪をなびかせ、片目を額あてで隠したはたけカカシが短距離走での理想のモーションで走ってくる。

「ナールトーvv」

その声を聞いた瞬間サクラの顔が青ざめた。

（ナルト馬鹿なの忘れてたわ。先生が今日のナルトをほっとくわけがないじゃない！！）

「あつのおエロ教師っ！ナルトの浴衣姿に目の色変わってるわ。ナルト！早く逃げなさい！食われるわよ！」

「はっ？食われる？」

「あーもう！！いいから早く逃げなさいっ！何とかここでカカシ先生を足止めしとくから！」

「ナルト、こっちだ」

さつと視線を走らせ、状況を確認したイタチはナルトに手を差し出した。

ナルトはわけがわからなかったが、サクラの必死の表情とどこか冷静さを欠いたイタチの表情に緊迫したものを感じてイタチの手をとった。

強くその手を握ってイタチは人の波を縫って走り出す。

すぐに2人の姿は人混みに紛れて見えなくなってしまった。

「こら兄貴！またナルトをつー！！」

地団駄踏むサスケにサクラの鋭い声が飛ぶ。

「サスケ君！今はそんな事言ってる暇ないわよ！カカシ先生が来る

わ！」

サクラたちの様子に自然と皆で陣を組むと、いろんな意味でやばい上忍を見据えた。

「よくわかんねーけどあいつ止めればいいのか？」

「そうよシカマル！今こそあんたの影真似の術の本領発揮よ！」

「・・・褒められてるのか、けなされてんのかわかんねーけどとりあえずやってやるよ」

シカマルはぽつりぽつりとだが印を結ぶとぐっと地面を踏む足に力を込めた。

『忍法・影真似の術！』

瞬時にシカマルの影が伸び、夜の影をも糧にしながら真っ直ぐに力カシへと向かった。

かくん！とシカマルの身体が揺れるのと、力カシが動きを止めたのは同時だった。

「はっ・・・何？誰よこゆ事するの」

咄嗟の事で何がなんだかわからない力カシは呆然と周りを見回した。

だがその頃にはすでに遅かった。

「今よ！誰かー！誰か縄持ってきてー！」

どどつと一斉にカカシに群がっていった下忍たちに、自来也と四代目は何ともいえない笑みを浮かべた。

「今のガキは過激だのう」

「あ、ははは……」

ナルトの置いていった荷物からりんご飴を発掘してかりかり食べながら四代目は肩を落とした。
対する自来也はするめをしがんでいる。

「それにしてもカカシは変態だのう」

「カカシも先生には言われたくないですよ」

かりかりかり。

「……お前そういう事いうとイチャパラの新作読ませんぞ」
「ええーっそれはちよつと」

かりかりかり。

「もうっほんと勘弁してほしいわー」

縛り上げた力カシをぽいっと2人のほうへほかったサクラに、大人2人は苦笑するしかなかった。

必死に走っていたら、いつの間にか人混みを抜け、2人は花を流したとは別流の川付近の並木のほうまで来ていた。祭の喧噪はとても遠くに聞こえている。

ここまでこればもう大丈夫だろう。

一応ナルトは後ろを気にしながらも、立ち止まって息を整えた。

「・・・っ」

ふと足に痛みが走った。

見ると、足の指の裏の皮がめくれかけている。

「いったー・・・」

「すまない、下駄だったな」

屈んで足を見ようとするイタチをナルトは慌てて止めた。
こんな綺麗とは言えない足にさわらせるわけにはいかない。

「イタチさんが謝る必要ないってばよ。それにこれくらいなら大丈夫だってば。気が抜けて痛くなっただけだから」

明るく言ったナルトだったが、頬が引きつっている。
先ほど少し見ただけだったのが赤く見えたものは血だろう。
イタチは息をつくと有無を言わずナルトを抱き上げた。

「イタチさん!？」

「座って休んだほうがいい」

「歩けるから降ろしてってば!」

突然の事に混乱したナルトは、間近で見るイタチの顔にどきりとしながらもどうにか降りようとものがいてみたが駄目だった。
それどころかぴしゃりとイタチに注意されてしまった。

「川岸に行くだけだ。おとなしくしている」
「・・・・・・はい」

ナルトは諦めると、落ちないようにイタチの肩をそっと掴んだ。
じんわりと布越しに伝わってくるぬくもりが気持ちよくて思わず目

を細める。

（何かほっとする・・・）

無意識にだかぴたりと首元に顔をつけてきたナルトにイタチは微かに息をつめた。
抱きしめている身体はとてもやわらかく、肌にあたる髪からはどこか甘いにおいがして頭が痺れた。

（こんな事になるとはな・・・）

いつまでも抱きしめていたかったが望むままにしているのはナルトが不信がるだろう。

イタチは座りやすそうな石を見つけるとそこにナルトを降ろした。
そのまま川のほうまで行き、腰のポーチからハンカチを出すと、水に浸して湿らせた。

それをもってナルトのところにもどると、彼女が止める前に足につける。

ナルトは微かに顔をしかめたが申し訳なさそうに笑って言った。

「・・・何かイタチさんに手当してもらってばかりだつてばよ」
「お前は何かと怪我が多いからな。任務の時ばかりか修行に付き合っていて何度お前の血を見たことか・・・」

「うーっ・・・でも今日は仕方ないってばよ。下駄なんて初めては履いたから」

丁寧な血と、ついてしまった砂を拭き取ってもらいながらナルトは抗議の声を上げた。

イタチはふくれているだろう顔を想像してくつくつと笑った。

「イタチさん、結構意地悪だつてば」

「そうか？」

「私で面白がつてるつてば」

「そんなつもりはないんだが・・・つい」

「つい！？ついつてなんだつてばよ！？」

「まあいいじゃないか。・・・ほら、これでだいぶ楽じゃないか？」

その言葉に下駄を履いて立ち上がったナルトは、からりと下駄を鳴らして数歩歩いてみた。

イタチは傷を洗ったあとに絆創膏を貼ってくれていた。

そのおかげか足は歩く分には痛まなくなっていて、ナルトは「うわあっ」と嬉しそうに声を漏らした。

「ありがとうつてば！もう痛くないつてばよ！」

「良かったな」

「イタチさん」

出したものをしまっていたところに声をかけられて目を向けると、月明かりに澄んだ瑠璃色の瞳が更に透明感を増してきらきらと輝いていた。

「・・・お祭り、つれてつてくれてありがとうだってば。イタチさんが誘ってくれて・・・行けて・・・良かったってば」

いろいろあったけどこんなに楽しいなんて思ってたから。

そうとろけるような笑みをナルトが浮かべた時、突然空が割れるような音がした。

どーん！と腹に響いてくるほど空気が震えたかと思うと、ぱらぱらと何かが弾けて舞うような音が後に続いた。

2人は同時に空を見上げた。

「あーっ花火だってばよー！！」

丁度川の上流、火影岩の上空で花火が上がっていた。

少しここからでは遠いが、赤や緑と藍色の空に光が散ってとても綺麗だ。

「すごいってば！何か流れ星みたいだってばよ！」

降ってくる花火の光を受け止めよるように両手を広げてはしゃぐナルトにイタチは破願すると少し屈んでそっと囁いた。

「俺もお前と行けて良かった」

びつくりして振り向いたナルトは、だがイタチのやわらかい眼差しに微笑んだ。

ナルトはそれにどきりとしながらも、小さな声で聞いた。

「イタチさん・・・」

「ん？」

「また、一緒に行ってくれるってば？」

「！・・・ああ、当たり前だ」

お前が望んでくれるなら。

今度はもつと屋台を楽しみながら、そして誰かに邪魔されない事を祈りながら。

2人は星が輝いて見えるようになるまで、
空に咲く大輪の光の花
を見上げていた。

温もり光る1（前書き）

いろいろとだめな方向に走っています。
ごめんなさい。

温もり光る1

「は?!今何て言った!?!」

ドアからのぞいた相手の澄んだ青い目がこれ以上開けません!、というほど見開かれ、あぐりと開いた口から白い奥歯まで見えていて、サスケは眉間に皺を寄せた。

こっという反応をされる事はそれこそ手に取るようにわかっていたが、やはり氣にくわない。

でも事情が事情なのでここは我慢だ。

サスケはため息混じりに口を開いた。

「だから一晩泊めてくれって言ってんだよ。忍術だけじゃなくて耳までドベになりやがったのか?二回も言わせんな」

「はあっ?!なんだってばその言い方はあ!!」

「ったくいちいちわめくな。入るぞ」

ぐい、とナルトを押しつけてサスケはうずまき宅にすたすたと入っていく。

きよろきよろと見回しながら構造を確認していく様は何とも言えない。

「ちよつ！！不法侵入だつてばよ！！」

ナルトが慌ててサスケを振り返るが何ら返事は返ってこなかった。

原因は些細と言えば些細な事だった。

里の復興第一という当面の方針の元ほとんどの忍が臨時休暇をもらい、住居の修理などにあたっていた。

それはうちは家も例外ではなかった。

九尾の妖狐事件の際は建物に被害はそうなく、イタチとサスケは両親亡き後もその住居に住んでいたのだが、今回は違ったのだ。

音の忍たちがうちはの集落を粗捜したようで、それは空き巣以上

の被害に合っていたのだった。

うちの集落は神社とイタチ、サスケの住居以外は少しずつ解体したり、そのまま新たな住居者を迎える家があったり、もしくは建て直したりと開発が進んでいたが、そんなことは関係なく被害に合っていた。

敵はかなり荒々しく、うちに関するものを探していたのか屋根が壊れたり、ひどい家では襖や障子などが形がないほどになっていたりと大変な状態だった。

「これは・・・がんばって2週間だな」

イタチとサスケの家は、襖や障子は無事なものの、玄関や屋根に被害があった。

平屋建ての家の屋根が半分ほどない状態では、さすがに困る。

任務が忙しく、ほぼ寝るだけに帰っていた家なので物が荒らされていることには大した被害はなく、とりあえず屋根だけでも・・・と大工にみてもらった結果がその言葉だった。

今回壊れたところの修繕だけなら2週間もかからないのだが、かなり年代の経った家なので、柱や棟板が傾いているので、これを機会に家の歪みを直してはどうか、ということだった。

非常事態として里外からたくさんの大工が里に応援に来ており、今ならしっかりと仕事ができるのでどうせなら、という大工の申し出を、イタチとサスケは了承したのだが――。

「一晩は外泊か」

大工に相談したのがすでに夕刻で、作業は明日からになるとい
とだった。

明日にはすぐに屋根の仮修繕をするので、明日の晩からは雨風が
凌げるようになるとのことだが、今夜はこの状態のまま。
イタチとサスケは外泊を余儀なくされた。

「俺は・・・火影様の護衛でおそらく夜勤になるからいいが・・・
お前、どうする?」

「・・・まあ、適当になんとかする」

と短い会話をして兄と別れたのだが、サスケには特に妙案がなかつ
た。

「・・・野宿は勘弁したいな」

昨日まで野宿に近い状態で里の復興に駆り出されていた。

今日からは各自の時間を優先するようにと指令が下っていることも
あり、のんびり、ゆっくりしたい。

ゆえに、仮宿舎には行きたくなかった。

「・・・となると。」

「・・・誰かに泊めてもらうしかないか」

全部の家が被害にあっているわけではない。
自分の同期の中でも、被害にあったのはうちぐらいだった。
さて、と泊めてもらえそうな人を浮かべようとして、はたとサスケは気づいた。

（泊めてくれていえる友達っつー友達なんていねえじゃねえか）

アカデミーの頃から一匹狼を決め込んでいたサスケには、友達らしい友達などいなかった。

同期の下忍たちとは話はするが、一緒に食事をしたり、まして家にお邪魔するような関係のものはいない。

そうになると、他の知り合いになるが・・・。

（イルカは何かとうるさそうだし・・・カカシの所は・・・汚そうだな
サクラならすんなりいきそうだがさすがに女の家泊まるってのは抵抗あるし・・・）

残るは・・・とサスケは顔を上げた。

「・・・ナルトなら」

（あいつも女だが普段があーだし、火影と二人暮らしだし・・・）

なんとなく、受け入れてもらえる気がした。

そう自決して、現在に至る。

サスケは玄関から入ってすぐの居間に扇風機を見つけて風にあたった。

しばらく外にいたせいで全身じっとりとした汗をかいて気持ち悪いのだ。

居間は卓袱台を中心に角にテレビが置かれ、いくつかある飾り棚には小さな鉢植えの観葉植物がいくつも置かれていた。

入り口の襖の向かいは窓になっていて外に出られるようになっていく。

全体的に暖色系の色で統一された部屋は嫌みがない程度にあたたかい印象で、初めて居るというのに妙に落ち着けて、サスケはふー、と目を閉じた。

「何でお前がうちに泊まるんだってば！」

バン！と卓袱台を叩いてナルトが叫ぶが、扇風機の風に髪をなびかせているサスケには効果がなかった。

「一晩ぐらい別にいいだろ」

「お父さんに聞かないと私ではいいかどうか答えられないってば。とりあえず、事情を話してくれってばよ」

ナルトは突然のことに戸惑っているようだが、何かわけがあるのだろうと氣遣っている様子が眼差しに現れていた。

サスケは、それに表情を緩めた。

（基本的に、やさしいんだよな）

思いつきでダッシュしているイメージがあるが、かなり周りのことをみていて、氣遣ってくれるのがナルトだったりする。

だから自分は甘えてしまえるのだろう。

サスケは事情を話す事にした。

それを「うわー、大変だつてばね」と大きな目をさらに大きくして聞いていた。

「そういうことなら良いつてばよ。あ、でも一応お父さんに聞いとくね。ちょっと待ってて」

ナルトはそういうと立ち上がり、玄関のほうへ――電話をかけに行ったようだ。

ほどなくして話し声が聞こえて来る。

「うん、そう。一晩ぐらいならいいよね?・・・うん。うん。・・・ん??!!あ、そうだね、サスケがそうなら。ん、わかったつてば」

話はかなり早くついたらしい。

ナルトは居間に戻って来ると、サスケに笑みを見せた。

「お父さん、いいって。あと、仕事にきりがつきそうだから早く帰って来るって」

「そうか」

ナルトの父、四代目火影の顔を頭に思い浮かべて、サスケは許可が出た事に素直にほっとしていた。
これで駄目だったら切ない事になっていた。
それにー！。

（父親がいたって・・・ナルトと一つ屋根の下）

ラッキーに違いない。

そう小さく幸せを噛み締めていたサスケの耳に、思いも寄らない名前が聞こえた。

「で、イタチさんも泊まる事になったから、サスケ、布団出すの手伝って」

「そうか・・・ってえっ！？兄貴！？」

「今日のお父さんのお付き、イタチさんだったみたいで」

四代目が帰宅するということは、護衛のイタチの仕事もそこで終わ

るということ。――家に帰れないイタチは適当に火影邸の仮眠室でもどこでも過ぐすと言ったらいいのだが、「弟君を預かるんだから、君1人増えたって変わんないって」と四代目の一言でイタチもうずまき家に泊まることになったらしい。

（まあ・・・仕方ないか）

サスケははあ、とため息をついた。

そんなサスケのため息は、布団などを支度をし、ナルトが晩ご飯の支度を始めた頃にはとても大きなものになっていた。

「お、今日は先客がおるではないか」

「!!!!!!」

帰ったぞー、と大きな声と玄関を盛大な音で開け、ずかずかと居間まで来たのは自来也だった。

ちゃんと顔を合わせるのが初めてだったサスケは、初対面ということと、突然の登場にめずらしく目を見開いた。

そんなサスケを尻目に、ひょこつと台所と居間の敷居の暖簾から顔を出したナルトは、「また来たんだってば??」と眉をひそめている。

その様子に自来也はにか、っと笑った。

「ナルトのうまい飯を食べようと思ってのお。それに今日は自分で酒を持参したからそう怒るな」

「・・・全く。そう言って毎日のように来るのやめてほしいってばよ。食費も馬鹿にならないってば」

そうは言うものの追い出そうとはせず、台所に戻って行ったナルトにサスケはめずらしくテンパっていた。

(・・・三忍の・・・自来也だよな・・・???)

大きな体躯と白く長い髪。

豪快という言葉がしつくりくるーはどしつと卓袱台の前、自分のすぐ横に座ると、テレビのチャンネルをいじっている。と、こちらに目を向けて来た。

うわ、っと何も言えず見上げていると、んー・・・と彼は唸った。

「お前は・・・確かうちはサスケじゃな？今日はどうした？」

「音忍に家壊されたんだって。で、今日はうちに泊まるんだってだよ」

「ほー、それは大変だったな。・・・お、すまんのお」

応えたのは自来也に酒用のグラスとするめを炙ったものを持って来たナルトだった。

ナルトはサスケの前には麦茶の入ったグラスを置くと、箸を卓袱台に並べ始めた。

「そろそろお父さんたち帰って来るってだよ」

「ただいまー」

ぴったりのタイミングで玄関が開き、四代目の声が響いた。

ああ、今度はナルトの親父と兄貴か、とため息をついたサスケの目

の前に、その2人とは別にもう1人、見知った相手がいた。

「あ？なんでカカシがいんだよ」

「あ？じゃないでしょ」

それはこっちの台詞だったの、と片方だけ見えている目がサスケを睨んでいる。

カカシは火影邸から四代目とイタチがうずまき家に帰る途中たまに遭遇し、事情を聞いたカカシが「それならナルトの晩ご飯だけでも食べさせて」と何がそれならなんだという強引さでついてきたのだという。

そんなこんなで、うずまき家の居間はかなり窮屈になっていた。普段は台所のテーブルで父と2人向かい合って食べるところだが、今日はテレビの前の卓袱台に、最終的にもうひとつ押し入れから卓袱台を出してくっつけて食卓とした。部屋は狭くなるが、充分に皆が食卓を囲めるだけのスペースが完成する。

「とりあえず俺、着替えてくるわ。あ、イタチとサスケも楽な格好のがいいでしょ？里の支給品でよければ俺のあるから着替えなよ」

とりあえず一晩、ということであちは兄弟はまともなお泊まり準備はしてきていない。

四代目にも促されたことで、2人は素直に着替えに立ち上がった。と、サスケを見て四代目は小さく唸る。

「ん、サスケぐらいのサイズだと……。ちょっと一緒に来てくれる？直接タンスと相談しないとわかんないや」

ということではサスケは四代目と共に二階へと上がっていった。とりあえず残されたイタチは、ナルトを探して台所へと入っていた。

ちなみに自来也とカカシは既に一杯はじめている。

「ナルト」

「あ、イタチさん、お疲れ様だつてばよ」

ナルトはテキパキと食事を完成させているようだった。

テーブルの上には肉じゃがから筑前煮といったような煮物を中心に和風の献立が所狭しと並んでいる。

イタチはナルトの家に入るのも、こんな風に料理をしているのも初めてみたが、その様子と並ぶ料理に素直に驚いていた。

四代目の代わりに家事をしているとは聞いていたが、実に板についている。

思わず黙り込み、エプロンをし、お玉を片手に汁物の味をみている。その後ろ姿に魅入っていると、くるりとナルトが振り返った。

「お待ちせして申し訳ないってば。もうご飯も炊けるから、もう少し待っててほしいってばよ」

「いや、その……今日はすまない」

「ほえ???何が?」

謝られた理由がわからない、ときよんとするナルトに、イタチは困ってしまった。

けれど彼女はこういう性格だと思い直し、苦笑する。

「サスケともども押しにかけてしまって・・・。お前も作業で疲れているのに料理まで・・・。この埋め合わせは必ずさせてくれ」

「うーん・・・緊急事態だし、イタチさんが悪いわけじゃないからいいんだってばよ。休めるときにはしっかり休んで欲しいし」

気にせずゆっくりしてってばよー。

と笑顔で言うナルトに、イタチは胸があたたかくなる。

実を言うと、四代目からうちに泊まらないかと言われたときは、その好意もとても有り難かったし、なによりとても嬉しかったのだ。

(ナルトの家に・・・)

サスケが押しかけたことがきっかけで弟と一緒に泊まることになったとしてもとても魅力的な状況だった。

ナルトとは暗部での最初のツーマンセル以来、それなりの数の任務に共にあたっている。

自分はナルトとの暗部の任務がメインで、任務が空く時に四代目の護衛の任に就いている。

けれどもそれでもナルトに会えるのは任務のときだけ。

もしくはお互いの休みが合った時に修行をする程度で、家に来たりするようなことはしていなかった。

それが家にお邪魔するどころか一泊できるという状況に、内心は自分ではびっくりするくらい舞い上がっている。

今だってそうだ。

いつもの忍服を脱ぎ、Ｔシャツにデニムのショートパンツ、そしてそこにエプロンとお玉をプラスしたナルトは、超絶的にかわいい。このままお持ち帰りして、自分だけで愛でられるのなら、ぜひそうしたいくらいかわいい。

そんなナルトが、自分に気遣いせずゆっくり休んで欲しいと逆にこちらを気遣ってくれている。

（本当に、かわいい）

ナルトに出会うまでは、かわいいという感情を誰かや物に抱いたことはなかった。

それがナルトが相手だと際限なくかわいいかわいいと胸が熱くなる。

ああ、いつまでもここにいたい、それではナルトの邪魔になつてしまうな。

イタチは緩みそうになる顔を意識してひきしめると、テーブルの料理を手に持った。

「もう運んでもいいよな？」

「あ、うん。助かるってばよ」

そうまぶしい笑みを見せるナルトに、イタチも微笑んだ。

その後面々の着替えが済んだところでちょうどご飯も炊けたので食事となった。

食卓には和食をメインにした実にさまざまな料理が並んでいて、サスケは目を見張った。

「これ、全部お前が作ったのか？」

「そうだってばよ。うーん、失敗はしてないと思うけど」

「ナルトの料理はおいしいよ。俺がいうのも変だけど、遠慮せず食べなさい。イタチも。まだまだ君も育ち盛りなんだから」

「ありがとうございます」

言われなくても食べている自来也とカカシをよそに、イタチとサスケは箸を持った。

ちなみに、台所を背にナルトがお誕生日席に座り、その左側の手前からイタチ、サスケ、カカシと座り、右側に手前から四代目、自来也と座っている。

サスケは取り皿に煮物を取り、一口食べてまた目を見張った。

「うまい」

思わず呟いてしまう程おいしかった。

とても凝っていたり、高級なお店のような見た目ではないが、家庭的で素朴な味はあたたかい。

実においしくてサスケはすぐに二口目を食べていた。

イタチも食べて、しみじみと呟く。

「久々にこんな料理を食べたな。お前は、・・・俺が料理をしないから初めてだろう」

「いや、初めてってことは・・・兄貴、俺が小さいときはいろいろ作ってくれてただろ？」

下忍になってお互いに任務で生活のペースがばらばらになってからは各自の炊事になっただけの話だ。

という会話をする兄弟に、四代目とナルトは一瞬複雑な笑みを浮かべた。

「・・・そうか。まあ自分だけだとわざわざ料理もしないしね。うちはナルトが俺の身体のこと気遣っているいろいろ作ってくれるから助かってるけど」

「俺はそれにお邪魔してる感じだからほんとナルトには頭あがんないんだよねー」

「・・・それなら任務に遅刻せずちゃんと来るようになってほしいってばよ」

ナルトの料理は相変わらずおいしいなあ、と幸せそうな顔をする力カシにナルトが目細くする。

えー、それならナルト、モーニングコールしてよ、という上司に、ナルトはえー、とますます目を細くしている。

「なんで私がそこまでしなくちゃいけないんだってばよ」

「俺とナルトの仲でしょ」

「カカシさんは、ナルトが小さい頃から知り合いなんですか？」

あまりに気兼ねない様子が気になってイタチが聞けば、やはりそうらしい。

四代目が説明してくれる。

「ナルトが生まれたばつかのときからカカシはうちにきてナルトの面倒みてくれたんだよ。俺もなかなか忙しくて、職場にもなかなかつれていけなかったから甘えっぱなしで」

ナルトの出自はいささか複雑なので、たとえそこが火影邸でもおいそれと連れて行けなかった。

それで四代目の弟子であるカカシがナルトを面倒みていたのか、とイタチが納得していると、でもさ、と四代目があたたかい目でイタチを見た。

「・・・イタチは俺と違って本当にサスケの面倒をよく見てたよね。サスケ背負って下忍の任務行く姿みて俺関心してたもん」

「っげほ！！・・・ってえ！！イタチさん、サスケつれて任務に行ってたの！？」

そんな姿が想像できなくてナルトが食べているものを喉に詰まらせるほど驚いていると、四代目がお茶の湯飲みを差し出しながら続ける。

「サスケ、今はどうかしらないけどものすんごいお兄ちゃん子で、人見知りも激しくてイタチがいないと泣いてばっかで1人にしておけなかったんだよね」

「そういえば・・・そうでしたね」

「おい、俺にはそんな覚えはないぞ」

もうだいぶ前のことだ。

イタチが記憶を反復しながら応えると、サスケが当然のごとく抗議した。

それには、四代目は当時を知る力カシと顔を見合わせて「そりゃ・・・」と答えた。

「君がまだ3歳か4歳ぐらいの頃だから覚えてないのは当たり前だよ。でも僕も力カシも君がイタチが草むしりやらゴミ掃除してる後をよちよちついて回ってるの見たことあるよ」

「そんな馬鹿な・・・」

信じられないと目元を手で覆ったサスケにナルトはけたけたと笑った。

「はははっお前ってば可愛い時もあつたんだってばね」

「このウストラトンカチが！俺は覚えてないって言ってるんだろ！」

「でも事実だつてばよ」

完全にからかうナルトにサスケはもういい・・・と食べる事に關心を向けた。

ヤケ食いに近いサスケを尻目に四代目の口は閉じない。

「にしてもよくイタチってサスケの面倒よく見てたよね。別にいやじゃなかったの？」

「・・・いやというか・・・気づいたらそうなっていたという感じですから。あ、ナルト、これもおいしいな」

「え？ありがとうだってばよ」

イタチはそれ以上会話を続けたくなくて、四代目の目を一瞬だけ強く見てからナルトに微笑みかけた。

（ナルトは、うちの事情を知っている）

うちは一族は九尾の妖狐事件で壊滅した。

父は九尾との戦闘中に戦死、母は非戦闘民の誘導の際に直接ではないが九尾の攻撃を受けた。

そのときの怪我がもとで、サスケが1歳になる前に亡くなった。

ナルトは完全ではないがこういった経緯を知っているので、このままうちの話題をしなくなかった。

彼女が必要のない責任を感じることが目に見えてわかるからだ。

四代目は純粹に自分がよくサスケを面倒みていたということを褒めてくれようとしているのだろうが、自分としては大したことをしたつもりはなかったので、褒められても正直身に余る。

サスケを任務につれていつていたのも、保育園の空気がみつかるまでの数回のことだ。

確かに家事をして、幼い子供をみて、任務もこなして、という生活は慣れるまで時間はかかったが、人に頼るほどでもなかった。

ひとえにサスケが聞き分けがよかったこともあるので、自分が評価されるならサスケも褒められて良いはずだ。

とにかく、ナルトには変な気を回してほしくない。

実際おいしかった料理を褒めれば、ナルトはこれ以上ないほど極上の笑顔を返してくれた。

任務のときにはあまり見る機会がない表情だ。

（せっかくこんな機会に恵まれたんだ。俺のことではなく、ナルトのことが知りたい）

四代目は自分が話題を変えたいことを察してくれたのだろう。

ふつと微笑むと、隣の自来也にお酌をし出した。

そんな頃には男ばかりの食卓である。

ほとんどの料理が空になってきていた。

それにナルトがテキパキと片付けを始めたのでイタチは手伝おうとしたが、「お客さんだからだめだつてばよ」と小首を傾げて笑顔で言われたので（たまらなくかわいかった イタチ談）のおとなしくしていた。

サスケは久々にまともにおいしい食事にありつけて満ち足りた顔をしている。

最近富みに素直じゃないだけ可愛げがない（同期にはクールビューティーと言われているようだ）弟でもほわーんとした顔をしているのを見ると微笑ましい。

そうイタチものんびりとしたとき、ふつと四代目が挙げた話題が空気を変えた。

「そういえば、先生はいつまで里にいらつしやるんですか？」

「特には決めておらん。まあ・・・小説のネタがもうひとつふたつ見つかったらかのお」

「え！自来也様、その小説って・・・！！」

きらきらとした目で身を乗り出した力カシに、自来也もフフンと決め顔で答える。

「そうだ、イチャパラの新作だ！」

「きゃー！！」

「いやいや、力カシ、そんな盛り上がりがないでよ。先生も。未成年がいるところで官能小説の話はしないでください」

ピシ！！と四代目の叱責が飛ぶものの、一気にテンションがあがってしまったのかあまり効果はなかった。

真剣にネタについての話が進んでいる。

「ネタなあ。それが行き詰まっておつてな。こーイエーイ！とした刺激が最近なくての、とんと筆が進まん」

「イエーイ！とした刺激というと・・・例えば？」

「例えばっつーと・・・そーだなー・・・おっ！」

「え？なに？」

自来也はざっと後片付けをして台所から戻ってきたナルトを見てにやーっと締めり無く頬を弛ませた。

その顔に嬉々としてカカシが、訝しげに四代目が身を乗り出した。

「何か思いついたんですか？」

「先生、変なこと言いませんよね？」

「おう、変なことではないぞ。ナルトのおいろけの術だ。あれやつた時のナルトがイエーイ！って感じたのう」

イエーイ！と片手を挙げた自来也の言葉と裏腹に、一瞬シーンとなった。

が、すぐにどよめいた。

「いきなりなんだつてばよー！」

「ええっ！！見たことあるんですか！？」

「え、お前それって・・・アカデミーの・・・！」

「「おいろけの術？」」

上から、ナルト、カカシ、サスケ、そして四代目とイタチである。それぞれが反応を示したのに再びシーンとして、なんとなく四代目が場を仕切り始めた。

「おいろけの術というのがあるんですか？」

「何だ、お前知らんのか」

「知りません。カカシとサスケは知ってるみたいだね」

「一度みたいんですけど、いくら頼んでもやってくれないんですよ」
「アカデミーの授業で女子だけでやった変化の術だろ？」

サスケによると、女子だけで変化の術のテストをした際、テーマを決めてやろうということになり、さらに審査員として三代目などを呼んでの機会があったとのこと。

その際のテーマが「色気」。

ただこのテーマに女子たちは必要以上に盛り上がりかなり過激な変化の術が多く出て「とにかくすごかった」と伝説になったのだ。

そのとき、特にナルトがやった術が審査にあたった男性陣に好評で（術の工夫、多重影分身というレベルの高さなどもちゃんと評価されて）一時期話題になっていたらしい。

それをカカシが聞き及び、ぜひ一度見せて、といっているがナルトは了承しない。

そこまで聞いて、四代目は「ああ・・・なんか三代目が言っていたかも・・・」と首を傾げた。

「鼻血が止まらなかったって言ってたよ。ナルト、そんな際どいの？」

「うーん。。。あれはみんなの意見をもらってやったやつで・・・際どいっていうか・・・ほぼ裸だってばよ」

「いや、裸じゃないだろ！雲がかかって見えそうで見えない、その絶妙さが良いんじゃない！ほれ、皆にみせてやれ！」

「やだつてばよー!!」

即答したナルトの顔は真っ赤だ。

（裸？雲がかかって見えそうで見えない？？）

一体どんな術なんだ！

イタチが思わずナルトを見れば、彼女は顔を赤くしたまま、少し目を潤ませていた。

よほど恥ずかしい・・・というかやりたくないのだろう。

とても気になるが、これでは聞けないな。

そう思っているとナルトが心底こまった様子で嫌だと訴えている。

「いやほんと、あれはもうタブーなんだってばよ。エロ仙人に見せたのはどうしても修行つけてもらいたかったからで・・・」

「なんだつまらんのおー」

「つまらないって何ですか。俺の娘に変なことさせようとししないでください」

「そうは言ってもなー。変化して大人になったナルトはこう、色気に溢れているというか」

「じゃあナルト、この人は言い出すとなかなかうるさい人だから、とりあえず大人に変化してみて」

お父さん、これまでの説明でだいたいどんなのかわかったから詳細は聞きません。

とりあえず、変化してみせたという事実だけでいいからちやつちやとやりなさい。

と言外に冷静に諭す父の様子に、ナルトはうつ、っとさらに涙目で言葉に詰まった。

それがいたたまれなくてそっと顔をうかがうと、ふっとナルトがイタチを見た。

「うつ、イタチさん・・・」

「ナルト・・・俺は無理にしなくてもいいと思う」

小声で悲鳴を上げるナルトにイタチも小声で返すと、ふるふるとナルトは首を横に振った。

「一度エロ仙人に見せた私が悪いんだってば。大人になるだけなら」

変化の術にもいろいろある。

第三者の姿を真似るのが最もよくあるケースだが、それ以外にも自分の身体をベースに年齢を変えたり、性別を替えたり、ということもありうるケースで、アカデミーなどでも練習する。

実際の任務では自分の正体をばらさないために全くの第三者になるが、後者も少なからず実用する。

うん、とナルトはイメージをちゃんと頭に浮かべると、印を結んだ。

「変化!!」

ぽふん、と白い煙がナルトを包んだ。

温もり光る1（後書き）

総ナルコ受です。

おいろけの術、アカデミーでの変化の術の練習内容については、私がここでのナルコのための設定を勝手に作っています。
ご了承ください。

イタチさんはナルトがかわいくて仕方がないってことでもお願いします。
次で完結です。

温もり光る2（前書き）

更新が大変遅くなり、申し訳ございません。

温もり光る2

自分をベースにして年齢を変える変化は、イメージというよりは自分の身体のチャクラの流れを感じ取ることが大切だったりする。変化する容姿を自分でイメージするというよりは、身体が持つ形のイメージというか、チャクラに染み込んだ遺伝子の形というか、その流れを生かして術に組み込むのだ。

ゆえに、若い者が年齢を上げれば未来の自分の姿に。

逆に今の年齢よりも年齢を下げるのであれば幼かった頃の自分に。けれどもやはりあくまで変化の術なので、実際の成長（もしくは若返り）した姿と寸分違わないかと言われれば嘘になる。

そうはいっても、その者の未来、過去をうかがい知れるという点が特色の変化である。

そうして、煙の中から現れたのは、実に綺麗な女だった。

ほっそりとした体躯に服の上からでもわかる、ふつくらとした胸。すらりとのびた白い腕や足はどこか艶めかしく、そんな身体に美しい金色の髪が流れ落ちている。

大きな青い目は少し丸みがとれたがやはりぱっちりとしていて長い睫毛が瞬きの度に揺れている。

ほのかに紅潮した頬や唇の色が鮮やかで、いやに色気がある。

服はもとも大きかったのか、多少窮屈そうだがほっそりとした身体には丈が短いというだけで特別な違和感はない。

(……想像、以上だな)

イタチは感嘆した。

普段のナルトと、暗部のナルトを知っていて、彼女が可愛らしくもあり、そして綺麗な容姿をしていることは知っていた。

けれど、本当に想像以上だった。

言葉を失ったのは自分だけではなく、カカシも四代目も呆然とナルトを見つめている。

隣のサスケなどもう放心状態だ。

…と、がばつとカカシが立ち上がって真っ正面からナルトを見つめた。

「やっぱりあれは錯覚なんかじゃなかったんだな…お前がまだ赤ん坊の頃に感じたあの感覚は運命というやつなんだな……」

ぶつぶつと呟くカカシに見た目は大人でも中身は12歳のナルト、不信感たらたらだ。

「カカシ先生何言ってるんだってばよ」

「ナルト！俺と結婚してくれ！」

「何でそうなるんだってばよ！！」

「わわっ！」

ダイブしてきたカカシをナルトはさつと身を退いて避けたので、彼

はそのまま畳につつこんだ。
とそこにいるとつかまりそうなので四代目のほうへとナルトは身体を寄せた。

四代目はナルトを片腕で囲みながら、「うわー」と間近で（仮）未来の娘を見て関心している。

「ナルト、かわいいかわいいとは思ってたけど、少し大きくなると綺麗系になるんだね。すごい綺麗！お父さん、びっくりだよ」

「えー、私はかわいくも綺麗でもないってだよ。お父さんは親ばかだってば」

（いやいやいや、平均点以上だろ）

そう内心サスケは突っ込んで、先ほどダイブしたカカシを横目で見て遣る。

確かにこんなナルトを見せられたら、さらにライバルが増えそうだ。

（カカシはただでさえこんなだったのに）

ちら、と横を見れば、端正な横顔は食い入るようにナルトを見ている。

（兄貴、どこでナルトと知り合ったんだよ…）

自分にとって一番のライバルは、きっと実の兄だ。

イタチという男はなんでもそつなくこなす。

それは任務でも、人間関係でもそうだ。

そつなく抜かりのないようこなし、そして――深入りしない。

周りに対しても関心がわからないのか、かなり淡々とした対応をしている。

それを冷たいとは言われないのは、イタチの人徳だろう。

けれどもやはり淡々とした性格をしている。

実の弟である自分には幾分か感情の起伏があるが、それでもめずらしいくらいだろう。

それがナルトに対しては全くその常識が成り立たない。

実に表情豊かに、さらには笑みまで浮かべているのだ。

12年間一緒に暮らしていても、物心ついてから――兄が笑っているなどきつと数えるほどしかなかった。

それがナルトの前では違うのだ。

弟としていろいろ考えるのは当然だろう。

とにかく、兄・イタチはいつもナルトを特別に思っているのだ。

それは自分が抱いているのとおそらく同じ類の感情。

（これ以上の障害があるかよ）

ナルトもとてもイタチを信頼しているように見えるのが余計癪だ。以前ちらつとナルトになぜイタチと知り合いなのかを聞いたら、「お父さんの護衛にイタチさんがつくことが多いから、いつからか」と言っていた。

けれど、それだけの接点でここまで親しくなるのだろうか。

うーん、とサスケが悩んでいるうちに「先生、もういいでしょ？

そろそろ帰って下さい。ほら力カシも起きて。君も帰りなさい」と2人を追い立てていった。

「邪魔したな」

「ほんとだつてばよ」

「ナルト――!!」

「はいはい、力カシ先生、また明日ね。おやすみなさい」

慣れているのかあつさりと自来也と力カシを四代目と見送り、ピシヤンと戸を閉めたナルトは、さてと、踵を返した。

「さて、お風呂入れてくるってばよ。お父さんはゆっくりしてて」「いつもありがとう」

そう言つてばたばたと廊下を行つたナルトを見送つて、四代目は居間に戻った。

そこではイタチとサスケが余分に出していた卓袱台を片付けていた。ああ、その辺で大丈夫だよ、と押し入れにしまいながら四代目はふう、と一息つく。

「ごめんねー。先生も力カシも悪気はないんだけど」

「いえ、…びつくりはしましたが、…一番大変だったのはナルトだと思います」

「ん？ 私？？」

準備だけなのですぐ戻って来たナルトは、すでに変化を解いていた。それにほっとしたり残念に思ったりしているうちに、ナルトは台所に姿を消した。

後片付けか、とイタチも立ち上がって台所へ行ったので、うわっとサスケが焦ったとき、四代目が口を開いた。

「そういえば、サスケ、カカシに習って千鳥ができるようになったんだよね？」

「え！あ、ああ、…まだ回数はそんなできないけど…」

「いや謙遜することないよ。すごいよ。あれはカカシがかなり考える考えたもので、雷の属性を持つ忍でもセンスがいる。というか、カカシが誰かに教えるのも初めてだ」

「え……」

「君は知ってるだろ？ カカシはちょっとひねくれてるから、本当に自分が認めた人間にしか、それこそ術なんて教えたりしない」

君は、認められたんだね。

やわらかい笑みと共に四代目はそう言って、サスケの頭に手をやった。

そうして、そっと撫でる。

「おせっかいかもしれないけど…君は十分頑張ってる。でも、君はとても自分に厳しいから、無理もそれだけするでしょ？ ほどほどにしないと身体が故障して動けなくなるよ」

「…俺は、そんな…がんばってない…」

なんで、こんな事を自分に言うのだろう。

サスケは四代目の手をそのまま頭の上に感じながら、俯いた。言葉に表現できない感情がわき起こって、静かに唇を噛んだ。

がんばってたら、……力があるのなら、……。

「俺は…我愛羅に勝てなかった」

（うーん、そこねえ…）

するりとサスケから手をどけて、四代目は眉を下げた。

彼の言う「我愛羅に勝てなかった」は、尾獣化した我愛羅との交戦のことだ。

（あれは、誰が相手にしても…勝ち負けというか、生きるか死ぬかの相手だよな）

サスケはそれが理解できた上で、なぜナルトが我愛羅を倒せたのか——そこが納得できていないのだろう。

彼にとって、ナルトは庇護すべき存在なのだ。

それが庇護するどころか逆に守られ、結局倒してしまった。

ナルトはガマブン太のアシストがあったからなんとか言ったと言っ

ていた。

我愛羅のあの尾獣化は一種の術だったらしく、それをガマブン太が知っていたので危機を回避できたのだ。

（たまたまだよ、では納得できないよね）

これまで築いてきた自信がズタズタになってしまったのだ。

今の下忍世代の先頭を走って来た彼にとってはとても大きなことだ。プライドは、彼を純粋な高みまでのぼらせる面も、踏み入れたら戻れない暗がりへと進ませる面も両方持っている。

そののどちらを選ぶかは彼次第だ。

思っているのは、選んだ道にあとで後悔をしないのならばいい、とそれだけだ。

だから、自分にできるのは事実をありのままに話すこと。

「ナルトが勝てたのは、たまたまだよ」

「たまたまって……！ たまたまであんな化け物を倒せるのか!？」

「……化け物……。化け物……ね」

そうか、化け物……か。

化け物に、なるのか。

一瞬言葉につまり、四代目は口元を手で覆った。
固まった思考を働かせる。

「口寄せしたガマが術の解き方を知ってたんだよ」

「…そうだよ。あの口寄せだって…俺の知ってるナルトは、あんな大きな術…」

「君だって千鳥を覚えてたろう？ナルトも自分なりに頑張って、成長したんだよ」

それは素直に認めなさい、と四代目は穏やかな口調で、けれど有無を言わさない声音で言う。

じっと青い瞳を睨む黒い瞳が、小さくたじろいだ。

「…それは、わかってる。でも、…俺がどれだけやったって、ナルトにも勝てねえし、それに、…この調子じゃー」

兄貴になんて追いつけない。

また俯いたサスケの消え入った声の焦燥に、四代目は微かに瞠目して、けれど微笑んだ。

もう一度その頭をくしゃり、と撫でる。

「イタチだって最初は下忍だった。人より昇格が早かったのは人出が足りなかったのもあるし…、でも彼が与えられた立場よりさらに上を目指して努力したからだ。はじめから強かったわけじゃない」

「……」
「忍に生まれた以上戦いばかりの生活。生きるためには強くなるしかない。…なぜ戦うのか、なぜ強くなりたいのか、自分なりの答え

を見つけないさい」

「……なんだよ、それ」

そんなの、忍だからじゃないのか？

掠れた怒った声が四代目に噛み付くけれど、当の四代目はわしゃわしゃとサスケの頭を撫でて笑う。

「それじゃ50点」

「はあ？　じゃああなたの答えはなんなんだよ？」

「俺？　俺はナルトが8割、里が2割つてとこかな」

「はああ？？」

どつという意味だよ、と苛立ちを通り越して呆れた声を出すサスケに、四代目はふふ、と綺麗に笑う。

それがまた様になっているのがサスケに有無を言わせない。

「君の正解は君にしか出せない。ま、今の君の答えが”忍だから”なら、お風呂入りながらなんで忍だと戦って、強くならなきゃいけないのか考えてみなさい。はい、立って立って」

「ついきなりなんだよ！」

はい、いそいでいそいでーと四代目はサスケの背を押して一緒に風呂場へと向かった。

脱衣場でからかう調子でサスケの世話を焼く声が聞こえてくる――

ーのを聞いて、そつとナルトは台所の暖簾をあけた。
そして居間に入り卓袱台に雪崩倒れる。

そんな様子をイタチは苦笑混じりに見つめて、すぐそばに腰を下ろした。

台所と居間は隣り合っているので、いくら食器を洗ったり片付けた
りして音を出しているとは言っても居間で話している事は筒抜けだ。
サスケを風呂場に送り出した四代目が居間に戻って来ると、ナル
トは勢い良く顔を向けて睨んだ。

「っ…全部聞こえてるってばよ!!」

「あー…ごめん、そうだよな。…いやあ、サスケがかわいくてつい
熱くなっちゃった」

かわいい!?

と目を点にしている娘に苦笑しつつ、四代目も座ってテレビをつけ
た。

一応とニュースをチェックし始める。

イタチは控えめに、けれど声をかけた。

「火影様、すみません…」

「いや、サスケはお年頃だからね。君には甘えたいけど甘えられな
くなってるでしょ。…カカシがもっとうまくフォローできるといい
んだけどね。彼も子供っぽいところがあるから」

むしろごめんね、と謝る四代目にイタチは眉を下げる。

隣でナルトも、少し気持ちを落ち着かせたのか静かな表情でテレビ

里の大人達からは言われたことがあるだろう表現を、同じ世代の、それも仲間に言われるのはとても堪えるだろう。

自室に行ったのは、自分とサスケの会話に思うところがあるからだろう。

そうでなければ、イタチやサスケという一応の客がいるときに自分の部屋にはいかない。

だからナルトが自室に行ったのは、自分の気持ちを落ち着かせるためだ。

ナルトは九尾に関わることで自分の前で弱音を吐かない。

自分が傷つくと思っっているから。

九尾を封印したことを、後悔させると思っているから。

「そんなこと、ないのにね。…」

「火影様…」

「君になら…ナルトは話せるかもしれない。だから、お願いできるかな？」

「…はい」

イタチは沈痛な面持ちでうなづくと、居間を出た。

足音を思い出し、階段を上がって気配を辿れば、すぐ左手の部屋に彼女がいるのがわかった。

ドアはしっかりと閉められている。

イタチはノックした。

部屋の中の気配がびくりと動いた感じがした。けれど、イタチは声をかけた。

「ナルト、俺だ」

「…イタチさん？」

驚いた声が聞こえて、少ししてドアが開いた。

そこにはいつもより近くなってそばで見られるナルトの顔があった。少しだけ丸みのとれた顔は、けれどそれ以上に大人びて見えた。

子供離れした、本来なら子供が考えなくてもよいような感情が、彼女の幼さを凍てつかせる。

それは”月読”の面をつけているときの、彼女の孤高さと同じものだ。

イタチはそれを感じながら尋ねた。

「入ってもいいか？」

「えっ…うん」

ナルトは小首を傾げながらも了承してくれたので、彼女の部屋へと入る。

入り口から正面の壁沿いに机やベッドがあり、そのベッドの方は大きな窓がはめ込まれていて星明かりが多く入って来ている。

そのことにイタチは眉を顰めた。

暗いところに慣れているせいか最初は意識しなかったが、ナルトは

部屋の電気をつけていなかったのだ。

と、ナルトがそのことに気づき、さっと視線をライトのスイッチにやったが、今更だと思ったのだろう。視線を彷徨わせている。

その顔が強張っているのに気がついたが、イタチは一瞬迷った末、ドアをしつかりと閉めた。

そして、込み上げた衝動のままにナルトを抱きしめた。

小さな身体は、すっぽりと自分の腕の中に収まってしまふ。

細い肩や腰回りは、このまま力を込めたら折れてしまいそうだ。

けれど、ふつくらとした女性らしいぬくもりも感じながら――イタチは消え入りそうに感じたナルトの気配に、抱きしめる腕に力を込めた。

「…っ、イタチさん!？」

ナルトの戸惑う声が聞こえる。

自分でも、大胆なことをしているとわかつている。

けれど、電気もつけていない部屋で、1人でいようとした様子が我慢できなかった。

「ナルト……」

「えっ…わっ…な、なに??」

名を呼べばびくつと身体を震わせてナルトが腕をつっぱって顔をあげようとしたので、イタチは微かに腕の力を緩めた。
至近距離で視線が絡む。

そのことにまた彼女が驚いて身体を震わせた。

けれど、逃げようとはしない。
何度も瞬きを繰り返しながらも、彼女は自分の視線を受け止めてくれた。

「イタチさん？…えっと、どうしたんだってば？」

「サスケのことだ」

「え……イタチさん、気にしてるんだってば？ そんな、大丈夫だってばよ」

「……ナルト、サスケはお前のことをそんな風に思ったりしない」
「……だから、大丈夫だってばよ」

そう言ったナルトは、笑っていた。
笑って、言った。

「大丈夫。だって……」

言われ慣れてるから。

「……………っ」

イタチは絶句した。

（確かに……）

確かに、そうなるかもしれない。

里の者は、陰で彼女のことを”化け物”と呼んできた。

そうだったことは、他の里でも同じだと聞く。

大戦を経験した者は、他里で九尾のような存在が兵器として、他里を牽制するようなものとして扱われていることを知っている。

そして、そういったことが当たり前の里であっても、迫害がひどいとも聞く。

人柱力とよばれる者が、しっかりと力の制御ができていたとしても。

木の葉では、九尾の力を、その姿を、皆が目の当りにした。

あの地獄そのものだった一夜は、人々に思い出しくなくても、そうはできない大きな爪痕を残した。

そして、木の葉では人柱力という存在も、当たり前ではなかった。四代目火影の封印術が一流のものだとしても、あの地獄を完全になかったことにはできない。

あの地獄を、九尾という脅威を、……”化け物”を、なかったことにはできない。

九尾への恐怖と、悲しみと、憎しみを、”化け物”を封じられたナルトに、どうしても向けてしまう。

その姿を見たら、名前を聞いたら、あの夜のことを思い出すから。

そして、彼女を否定する。

彼女がすべての根源だというように。

”化け物”という言葉は、あの夜、九尾を見たものたちがナルトに
対して投げつけていたものだった。

それは彼女が物心ついた時から、肉親以外の者達から呼ばれてきた
名だったのだ。

慣れるはずが無い。

でも、今笑う彼女は、もはやそのことで流せる涙を持っていないの
だろう。

”慣れている”と言ったナルトに、そうか、とイタチは納得する。
納得して、やるせなくて、彼女の肩に額とつけて顔を埋めた。

さらに密着したことに、細い肩や首がびくつと一度大きく震えた。

ああ、こういうことには慣れていないのだな。

きつと父親ぐらいにしか、抱擁などされたことがないのだろう。

経験の話であればそれは自分も同じ事だ。

けれど、自分は肉親からの愛情や、周りからのぬくもりに飢えて育
つてきたわけではない。

物理的なやさしさがなくとも、日常の会話や生活のやりとりでそれ

を得てきた。

むしろ、一番の悲劇を受けたと同情され、過保護にされた。けれど、ナルトは違う。

やさしい言葉も、心配されることも、まして今自分がしているような抱擁なんて、きつと慣れていないのだろう。

イタチは顔を上げると、抱きしめる腕を解いて、代わりにナルトの顔を両手で包み込んだ。

「怖かっただろう？」

「……？」

「我愛羅を見て……怖かっただろう？」

「……、え？……」

一番大きく、ナルトの瞳が動いた。

やわらかそうな淡い色の唇がわななく。

イタチは、その表情を読み取ろうと目を細めた。

……震えながら薄紅の唇が薄く開き、言葉にならない音がこぼれる。

ふっと彼女は目だけ俯いた。

掠れた声が自分と彼女の間の空気を震わせる。

「……いたち……さん……」

「九尾は……九尾のことは、お前自身がよく知っているだろう？」

「……」

「怖かっただろう？……我愛羅を見て、いろんなことを考えたんじゃないか？」

「…それは…」

九尾が”化け物”と表現されることは、――残念ながら否定できない。

自分は自分の中のその姿を目の当たりにしてきたし、それが一尾と酷似していたことも、否定しない。

自分の中の封印の中で、唸り声を上げて自分を脅かす九尾の姿を、声を、ナルトは知っている。

ナルトが、九尾は”化け物”だと思っている。

――怖かったのは、事実だ。

自分も何かのきっかけでこうなるのだろうか、怖かった。

けれど同時に、自分を追い込み、常に薄暗い影を背負う彼に同情した。

辛くないわけがないと。

いつかゆつくりと話ができればいいのに、と。

自分で理解できることがあって、それで助けになることがあるなら、と。

彼も、自分も、”化け物”ではないのだから。

だから、サスケが”化け物”と言ったことは確かにショックだった。

彼がそう表現する気持ちはわかる。

自分だって、この境遇にいななければきっと同じ事を思っただろう。何も知らないのだから。

けれど、それでもやはり、辛く感じる。

我愛羅を――化け物だと言ったサスケの言葉が、真つすぐに刺さる。

その表現に、一氣にいろんなことを考え、そして同時に、自分との力の差を気にするサスケに罪悪感を感じた。

自分は、既にサスケよりも強い。

それこそ、里のなかでもそれなりのレベルにいる。

暗部に所属している。

そういったことをすべて隠して、自分は仲間たちとの楽しい時間を甘受しているのだ。

それは、手放したくない。

自分の真実をすべて偽った上の信頼と友情であっても、掴んでいた。い。

そういったことを考えて、胸が苦しくなって、少し一人で消化したかったのだ。

けれどイタチが来てくれて、あれほど沈み込んでいた気持ちはすつきりと落ち着いていた。

同時に、どうしていいのかわからなくなっていた。

こみあげるこの感情はなんなのだろう。

むずがゆくて、逃げ出したくなるけれど、このまま離れたくない、変な感情。

きゅ、とイタチの胸元の服を掴んで、ナルトは喉を震わせた。

熱くなる目を、それでも彼の黒曜石のような瞳に向ける。

「…だめだつてばよ…」

「…だめ？」

「そんなに、やさしく…しないで…」

小さな声で言つたナルトの大きな目から涙がこぼれて、頬を濡らした。

イタチは自分も泣きそうに顔を歪めて、息を吐く。

「…ナルト」

「やさしいこと…言わないで…!!」

これ以上言われたら、甘えて…しまう。
縋り付いて、頼って……信じてしまう。

この人は、自分をみてくれると、理解してくれると、思ってしまう。
――それは、自分にとってはタブーなのだ。

信じて、自分の存在はなかったことにされる。
信じたくても、嫌われてしまう。

同期の仲間には、”ドタバタで、おっちょこちょいな、うずまきナルト”という表層を見せている。

それが素直な自分には違いない。

でも、今日の前にいる人は、自分の本来の姿を知っている。
だから、歯止めが利かなくなるだろう。

自分の事情を知ってくれているからと、頼って、甘えてしまうだろう。

それは、いけないことだ。

だから、手遅れになる前に――。

イタチから離れようとしたナルトは、けれど腰のあたりに腕が回されて、全く動けなくなった。

それに反射的に抗おうと思いつき身体を動かしたら、無理なほうに力が入ってかくん、と体勢が崩れた。

あっ、としゃがみこむようになった身体を、さきに膝をついたイタチが下から受け止めるように抱きとめた。

――気づけばドアを背に床に座った彼の足の上に座り込むような体勢になっていて、一瞬で体中に熱が走った。

さらに感情が高まって、視界が涙でかすんで何も見えない。

抗議しようと開いた口からは、ひきつった声しかでなかった。

「イタチさん……!!」

「……俺はやさしくない。事実を言っているだけだ」

「っ……そんなことないってば。イタチさんはやさしいってばよ」

「……全く強情だな。こういうときは素直に甘えてくれると嬉しいんだけどな」

「うれ……しい……?」

とても甘美な言葉に、ナルトは心が跳ね上がった。

どうして、この人はこんなことを言ってくれるんだろう。

この人は、本当に自分を気にかけてくれている?

心が動いた。

腕の中でゆるゆるとナルトが顔をあげるのがわかって、イタチは彼女の髪に顔を埋めた。

だからお互いに表情は見えない。
声を漏らしたまま固まってしまったナルトに、イタチは言葉を重ねた。

「俺は、お前に甘えてもらいたい。…今日ぐらい、俺に頼ってくれないか？」

「私、イタチさんに十分甘えてるってばよ」

「じゃあ、もつとだ」

そう言つて、彼はやさしく自分の頭を撫でてくれる。

あたたかいぬくもりに、ナルトは緊張などで強張っていた気持ちがほどけていくのを感じた。

もつと、という言葉に大胆になれて、こてん、とイタチの肩におでこをあてた。

ほう、と息をつく。

（どうして、イタチさんは、こんな風にしてくれるんだろう）

自分の気持ちを理解してくれて、ほしい言葉を、やさしいぬくもりを与えてくれる。

それが慣れなくて、まだどう接して良いのかわからない。

（このまま抱きしめてもらって、…いいのかな…）

すつぱりと抱きしめられた今の体勢は、少し冷静になればすごく恥ずかしい。

恥ずかしいけれど、――居心地がよくて少しでも長くこうしたいと思うのはいけない……よね。

けど、もう少しだけ。

もう少しだけこのまま。

心のもやもやは静かになっただけ、叶うのなら、もう少しだけ。

「イタチさん……」

「……ん？」

顔をつけた胸が声と共に震えて、自分の頭に寄せられたところで息が吐かれた。

今この人の腕の中にいるのだと、あたたかい抱擁にナルトは今だけだからと目を閉じた。

「……ありがとうだってだよ」

「……ああ」

すり寄ってきたナルトの気配に、イタチは自分の方がうつとりと目を細めた。

異性を――というか幼いサスケ以外（この場合は抱き上げたりおぶったり）抱きしめたことがないので比べようがないが、こんなにも心地よいものなのだろうか。

自分の方がナルトを抱きしめて、どこにも行かないように力を込めているというのに、懐の温かい気配が自分を包み込んでくれている

ような感覚に陥るのだ。

ふれあう身体を通してトクトクと聞こえてくる脈の音も、かすかな息づかいも、安心感へとつながっている。

（ああ、くせになりそうだな）

一日に一回はこうやって抱きしめることを許してもらえないだろうか。

そんな馬鹿なことを思ってしまうほど、心地よい。

自分が助けになりたかったのに、自分の方が癒されている。

（…手放したくない）

この腕の中のぬくもりを、叶う事なら、ずっとこのままに。

そう願いながら、イタチはナルトの頭をゆっくりと撫で続けた。

温もり光る2（後書き）

この後、ナルトがサスケの次にお風呂に入りーをし、今でイタチとサスケが、二階の各自の部屋でナルトと四代目が寝て、朝を迎えます。

ちゃんちゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5911z/>

金色の星

2012年1月9日21時55分発行